

---

# 断固拒否！

久

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

断固拒否！

### 【Nコード】

N3383R

### 【作者名】

久

### 【あらすじ】

異世界に紛れ込んでしまったごく普通の女子高生。宮廷魔術師の屋敷で世話になっていたのだが、王太子の補佐官に紹介された事により身辺が急変する。数ヶ月でこの世界の言葉を取得した頭脳に眼を付けられ、やる気のない王太子の正妃候補として祭り上げられる羽目になった。こんな男と結婚なんて冗談じゃない！逆ハーとか望んでないし！

ずる賢い主人公が王妃になるのを阻止すべく奮闘するラブ？コメデイ。

## 1-1 殴っても良いですか？

さらさらと揺れる銀に冷たい光が宿る碧の双眸。

少女は呆然と美人の男だあ、と呟きそうになったが、次の瞬間にはその言葉を飲み込み表情を引き攣らせた。

「何だこの貧相な娘は。ドロ―殿、これが貴方の秘蔵っ子だと？」

失礼極まりない男の発言に、少女はうわあ、と声を上げた。

貧相とは何処を見て言っているのか？成長途中（希望）の胸の事か？それとも平凡な顔の事かっ！

ぎりりと睨めつけてみるが、冷ややかな視線は少女の身体を上から下へと滑って行く。胸元で殊更残念そうに眉が寄せられたのは気のせいではあるまい。

「悪かったな貧相で！殺意！本気で殺意！先生、何か尖ったものか鈍器的なものか紐状のものを！！」

「待て待て待て！何をする気だ！」

先生と呼ばれた男、モール・ドロ―は慌てて少女の腕を掴んだ。彼女は誰が相手だろうと、所望した凶器的な物で攻撃するだろう。それが次期宰相と呼ばれている男であろうと。

一般的な少女らしさは彼女には存在せず、それを求める事も無駄だと理解している。共に過ごした数ヶ月で理解せざる負えなかった。孫ほどの年齢である彼女に振り回される様は実に滑稽だろうとごちる。

「カリイ、落ち着くのだ。コルト殿に無礼を働いてはならんと言っ

ただろう」

「先に無礼を働いたのはあっちですよ！ 私悪くない！ 鈍器鈍器！」

この場に連れて来るには早過ぎたらしい。

暴れる少女を背後から羽交い締めにしたモールは、深々と息を吐いた。

美人の男、ウォーク・コルトは白々と少女を眺めた後にモールへと問い掛ける。

「異世界から来たというのは本当ですか」

「はい。確たる証拠と言われれば何も無いのですが、見たことのない材質で作られた衣服を身に纏い、突然目の前に現れた。聞いた事も無い言葉と文字を使う」

そこで言葉を止め、未だ暴れる少女に落ち着きなさいと声を掛けた。

「僅かな時間で言葉を理解し、私が挑んでいた公式の矛盾点を指摘する賢さは恐ろしいものがありますが、他国からの間者にしては無防備過ぎるのです」

「ごく普通のジョシコーサーですから」

「何だそれは」

美人の問い掛けに少女はむっつりと頬を膨らませ、もう暴れませんから離して下さいと声を上げた。

モールが腕を離してやるとぐると肩を回して解す。羽交い締めという初めて受ける行為は脱臼するかと思った。無駄に暴れたのは自分なので文句も言えないが。

「この世界には学校はあっても、金銭的余裕がある人間、しかも身分が高い人しか通えませんか。私の国では九年間の義務教育期間があつて、誰もが学校に通えます。ジョシコーサーとは、その義務教育を受けた後、更に教育を受ける女子のことです」

「教養を持った女だと言いたいのか？」

その行動でか、と問い掛けられているような錯覚を起こしつつ、引き攣る頬を押さえながら首を振った。

「半数ほどは、更に上の教育機関に行くので私は普通的女子ですよ」

普通、と続けた少女のどこが普通なのか説明して欲しい。モールは自然と寄つてしまう眉根を解しつつ、コルト殿と声を掛けた。

「カリイはこの世界にはない知識と教養を持っております。必ずこの国に利益をもたらしましょう」

「お国のため、とか柄じゃないので、国に仕えるとか辞退させていただきますね」

むつつりとしたまま横を向いた少女を見据える。意思の強そうな双眸はばかりとした二重ながらも釣り上がり気味で、気が強そうな印象が強い。背中の中程で揃えられた黒髪は癖もなくさらさらと揺れていた。

一見すればごく普通の少女だ。だが、普通の少女が次期王位継承者の補佐官を前にして、このような態度を取れるものか。

「面白いな」

「…はい？」

怪訝にこちらを向く少女に笑んで見せると、彼女は音を立てて凍り付いた。王城の花と言われる容姿に何と失礼な。

「私の身の回りを世話させてやろう」

ぽっかりと開けた口に菓子でも放り込んでやろうか。ウォークが、執務机の引き出しから手頃の菓子を手にした所で覚醒したらしい少女が、ななな、と声を震わせる。

「断固拒否するっ!!」

扉の前に控えていた男が、抑え切れない声を漏らして肩を揺らしていた。

## 1-2 親切にて身を滅ぼす

「はい？」

「いやだからな、カリイ。一度殿下にお目通り願おうと思う」

カリカリと羽根ペンを動かしていた手を止め、見上げた先には人の良い笑顔を張り付けたモール。

カリイと呼ばれた彼女、甲田光は怪訝に眉を寄せた。こうだひかり

「何で今更？私がお世話になり始めて随分経ってますけど？」

「うむ…」

モールは彼女が居候する屋敷の主であり、身分は宮廷魔術師。ロード城の一面にある屋敷は、国王から賜った研究所であり、彼の住まいでもある。

「カリイの頭脳はこの国の利益になる」

何を大きな事を言っちゃってるかなあ。

光はこっそりとごちてから嘆息した。

「確かに、私はこの世界より文明が進んだ所から来ましたよ。でも、それを国の為に役立てるとかいう高尚な趣味はありません」

自分の勉強でいっぱい입니다、と続けた彼女は、僅か五十日程でこの世界での公用語を習得し、現在は読み書きを我が物にしようと思死だ。

幼さの残るごく普通の少女にしか見えないが、国で最も優れた魔

術師とされるモールを超える頭脳を持っている。

自分の元に現れた事を神に感謝するほど、余所には渡せない優秀さだ。

「カリイ、私はこの国に仕える者だ。私が世話をする君も、この国に仕えて欲しいと思う」

「勿論、先生には感謝しています。この世界の言葉すら分からない私を保護し、知識を与えてくれた」

日本の片田舎で女子高生として暮らしていた光がこの世界に紛れ込んで六十三日。帰宅途中で立ち寄った大型スーパーで揺れた、と思った瞬間、気付けばモールの不安げな顔が目の前にあった。

この世界の言葉とは異なる日本語で痴漢！と叫んで、暴れたにも関わらず、モールは優しく根気強く接してくれた。あからさまに怪しい人間だというのに城の警備に引き渡すことなく匿い、言葉もこちらの常識を教えてくれたのも彼だ。

一生掛けて帰すべき恩義だと分かっているが、彼女にとってはそれが国に仕える事にはならない。モールに仕えろと言われれば素直に頷いたのに。

「私に何かあれば、君を後見する人間も居なくなるのだ。君は自身で上に行くだけの力がある。殿下は身分にこだわらない方だから、きつと執り成して…」

「心配無用！！自力で生活するだけの知識は手に入れたから、先生に楽させてあげられるよう頑張るよ。私のことは心配しないで先生！」

ぐっと拳を作った彼女の趣味は資金運用である。父親がやっていた投資に興味を持ち、勘と知識を活用して父親の年収ほどを得た彼女は、母親には喜ばれたが父親には悔しがられた。

こちらの常識さえ手に入れば、後は何とでもなる自信はある。



それに、勉強してるのは日本に帰る手段を探す為でもあるし

光がこっそりと口にした言葉にも気付かずに彼女の肩をがしりと掴むと、モールは熱く主張した。

「その能力を最も活かせるのが、殿下の元だと思うのだよ」

その言葉に光はうむ、と腕を組み考え込んだ。

殿下といえはこの国には王太子しか存在しない。この国は一夫一妻制で側室は許されておらず、王太子を産み落とした王妃は身体を壊して床に伏せ、王太子が十五になった年に逝去した。成人するのを見届け、役目を果たしたと言わんばかりの穏やかな死に顔だったらしい。

その後、後妻を迎えようとしたが、その直前に国王は病に伏せた。次の子は望めまいと後妻の話は消えてしまう。

たった一人の後継者として育てられた、さぞ立派な王太子だろうと思ったのだが、覇気の無い、のらりくらりとした食えない男だということだ。十八になっても正妃を迎えようとしないと零したのは、この屋敷に仕える、光と変わらぬ年代の侍女である。聞いてもいないというのに、王城の噂をべらべらと話してくれた。

陛下のご病気は悪化するばかりで一向に回復なさらないし、王太子殿下はあの調子で、この国は宰相閣下が牛耳っているようなものよ。殿下には多くの縁談があるというのに、どんな良縁でも見向きもしないものだから男色ではないかという噂よ。

思っていた以上に生々しい話を聞かされ、王室とか係わり合いになるのマジ勘弁、と日本語で呟いた光。

だが、困ったように自分を見詰めるモールの双眸は、心底光の身を案じているのだと訴えている。仕方ない。

「会っただけ会ってみましょうか」

あんな男に仕える羽目になるのなら、拒否しておけばよかったと後悔するのはこの日の午後である。

## 閑話・光とフィカリイ（前書き）

迷い込んだばかりの主人公の微かな迷いと葛藤、そして、侍女1日目の光とウォークのやり取りです。

## 閑話・光とフィカリイ

「ひ・か・り！」

「フィ・カ・リイ」

「だあああもう！だから光だっつてんじゃないか！」

目の前できょとんと首を傾げる中年男性に光はがしと頭を掻いた。

中年男性、モール・ドローは、光が目覚めてから呼び付けた侍女に向かって何か間違ったかと問い掛けている。侍女も同じように首を傾げていることから、光は一つの結論を導き出して肩を落とした。

どこをどうやってこの国に来てしまったのか分からないが、日本語は全く通じない。そして、自分の名前である「ひかり」の「ひ」は発音出来ず「フィ」になってしまう。

「何だよフィカリイって。無駄に楽しそうに聞こえちゃうのが余計ムカつく」

発音出来ないものは仕方がない。光は諦めてベッドに潜り込んだ。ひよこり、と顔だけ出して二人を見上げる。

「もう、カリイで良いです」

「カリイ！」

「カレーじゃないからね、カレーじゃ…」

とりあえず寝てみることにした。目覚めればこれが夢であったというオチを期待して。

目を覚ました光はこれが夢ではなく、全て現実である事に肩を落とした。

モールが身振り手振りで教えてくれたのは、屋敷の前に倒れていた光をモールが発見して部屋に運んでくれたらしいという事だった。持っていた鞆はサイドテーブルに置いてあり、慌てて携帯を取り出したが圏外の文字。

状況からして誘拐でもされたのだろうと思いつたが、ごく普通のサラリーマン家庭から身の代金を要求するなど実入りの良い犯罪ではない。

数万円で殺人しちゃうような世の中だしなあ。どこかに売られるところだったんだろうか。ごく普通の容姿である自分が高値を付けるとは思えないけど。

全く聞いた事のない言葉に、一体どんな辺境に誘拐されたのだろうかと悩むが答えは出ない。日常会話もままならない拙い英語で話し掛けてみたが、これまた首を傾げられた。英語圏ではないらしい。部屋にランプの明かりが揺れているということは電気は通っていないのだろう。

モールはアメリカ系というよりはフランス系の白人男性で、光の部屋に出入りした三人の侍女は小麦色の肌をしたラテン系に見えた。国籍がさっぱり分からない。何処だここは。

考えた所で答えは出ない。世界地図を見せてもらおうにも言葉が通じないのでは地図を貸してくれとも言えない。まずはここの言葉を覚えるしかあるまい。

どうやってそれらを伝えようかと悩む前に、本来は幼児向けの教材であろう、日本で言うところのあいいうえお表とどうぶつ図鑑を用意された。

見たこともない文字を一字ずつ発音してくれるモールに心底感謝しつつ、その横にカタカナで書き込んでいく。

表を完成させ、発音練習とばかりにどうぶつ図鑑を音読していた光は「フィカリイ」が、豚のような顔にもこもこと毛を生やした動物だと知りがつんと落ち込んだ。モールの妙な笑顔はこいつを想像していたに違いない。

更には、図鑑の半分は見たこともない動物であることに、少しずつ不安を覚えていった。

翌日、モールが持ってきた見たこともない世界地図によって自分が迷い込んだのが異世界だと確信する。どの地形も、世界地図で見た記憶がない。

彼女の自慢の一つは記憶力の良さであり、友人と張り合って覚えてた世界地図は今でも迷いなく描ける。

どの大陸も、島も、このような形はなかったと断言出来た。

神隠しに遭った人ってこういう目にあってんのかな。

泣くでなく肩を落とすでもなく、光は「あいうえお表」を睨み据えた。まずは言葉と知識だと拳を握り。

「お前の名は」

冷血美人に問われ、光はむつりとカリイですと答えた。

「カリイだと？」

カリイがこちらで夕陽だと知ったのは、ここに来た日のことだ。うっすらと笑んだウォークはお前のどこが夕陽だ、言いたいらしい。怒りに頬を引き攣らせた。

「本当はヒ・カ・リ。この世界ではヒが発音出来ないので、カリイと名乗っております」

フィに聞こえぬよう、はっきりとした発音で言ってる。美人もやはり「フィカリイ」と発音し、面白くなさそうに口を噤んだ。暫く考え込んでからもう一度と催促される。

どこか優越感を覚えながら、光はにんまりと唇の端を上げた。

「ヒ・カ・リ」

「フィカリ：フィ：」

「ヒ！」

「フィ」

十回程繰り返すうち、何だか面白くなってきた。小さく声を零す。

「ヒ」

「ヒ、カリ」

「うはあ?!」

「私に不可能はない」

にやりと笑んだウォークはもう一度、ヒカリ、と名を呼んだ。

妙に艶っぽいその声に、ぞわぞわと背を這い上がる悪寒に似たもの。ヒツと声を上げて叫ぶ。

「わたしはカリイ! カリイです!! 光って呼ぶなあ!」



## 1-3 笑い上戸の騎士

「お嬢さん！」

「はい？」

聞き覚えのない声に振り返ると、高価そうな騎士服に身を包んだ男がにこにこ見下ろしていた。

モールの屋敷から程近い厩舎前。そこを突っ切れば国立図書館がある離宮へは直ぐで、今まで光は何の気無しにその近道を利用していたが声を掛けられたのは初めてだ。

その笑顔からは咎める気配は見えない。

がっしりとした体躯に見上げるほどの長身。まさに騎士と言わんばかりの身なりと風貌に光は首を傾げた。モールに着く護衛ではない（モールはあれで身分が高いらしい）。顔見知りの彼らよりずっと身分が高そうな男が、何の用であろうか。

「魔術師殿の御弟子さん、だよね？」

「はあそうですか」

視線だけで貴方は誰かと問い掛けると彼は笑って謝罪した。

「俺は近衛第二隊隊長のマク・サクル。怪しいものじゃないよ」

「怪しい人は皆さんそう言いますねえ」

「ウォークのトコに居たじゃない」

「ウォーク？」

それは誰だ、と首を傾げた彼女にマクはけらけらと声を上げた。

「あいつ、名前も覚えられてないとか！」

「……ああ、もしかして冷血補佐官殿ですか」

光の態度と言葉に、マクは腹を折って笑い出した。何だか面倒な男が増えた。これは逃げるが勝ちというやつか。

「じゃ、私急ぎますので」

「いやいやいやちょっと待ってよ」

あー腹痛い、と身体を起こした男を冷ややかに見上げてみるが、怯む様子もなく楽しそうににやにやとしている。

「あいつに侍女として着くんだろ？顔を合わせる機会も増えるだろうと、挨拶したかったんだよね」

「それはご丁寧にどうも。私は侍女になるつもりはありませんので、そのように補佐官殿にお伝えください」

「あいつが決めた事は、殿下でも覆すのは大変なんだよ。早めに諦めない」と

「私の諦めの悪さは類を見ません」  
「なにそれ」

けらけらと笑う。笑い上戸かこいつ、と冷ややかにねめつけてから止めていた歩みを進めた。

「いくら君が諦めなくても、あいつは権力持ってるからねえ。最終的には魔術師殿を人質に取るくらいの卑劣な事は平気でやるよ?」

「…それで?」

「うん?」

振り返ると、大男のくせに愛らしい仕種で首を傾げて見せる。

「うわぁ、いらつく」

「良いなあ君！」

近衛隊と言え、王族の側で身を護る事を許された騎士であり、その地位は騎士の中ではかなり高いはずだ。第二だか第一だか知らないが、その隊長がこんな緩い笑い上戸でいいのだろうか。

「貴方は何をしたいのですか？」

「ん？ご挨拶？」

その言葉に光はぎりりと齒噛みした後表情を一変させにこりと笑んで見せた。

「……お聞き及びかと思いますがこことは違う世界から参りました。コウダヒカリ。こちらではカリイと呼ばれております。それでは失礼致しました」

一方的に言い捨てて頭を下げる。そうして颯爽とその場を去った。できれば二度と係わり合いたくない男だがそうはいかないのだろう。背後でけらけらと笑う声に、光はそっと嘆息した。

## 1-4 侍女と猫耳

背の高い男の冷酷な碧に見下ろされ、光は不機嫌を加速させた。くつり、と意地悪く笑む様も無駄に美しくて余計癪に障る。思い切り眉根を寄せて睨めつけてやっても黒い笑みは変化ない。むしろ愉快そうだ。

「酷い顔だな」

「生れつきです！」

不機嫌を露に叫んだ彼女を愉快と言わんばかりに濃くした笑みで見下ろしている男。

「このドSめが」

小さくごちてから自分の服装を見下ろして嘆息した。

黒に近い藍色のワンピースに白いエプロン。メイドさんか、とごちる。屋敷の侍女たちが着ていた見馴れたものと同じであるが、まさか自分が着る羽目になるとは。

救いは現代日本でメイド服と呼ばれる物よりシンプルで丈が長いことだ。あんなひらひらでふわふわのを、ごく平凡な容姿である自分が着ればどれほど滑稽だろうか。その姿を想像すら拒否して思考を止めようと努めるが、どうしようもない想像ばかりが広がって行く。

「飲み物を用意してくれ」

「は？」

誰が猫耳なぞ着けるか、と妄想にごちたところで指示を受けて光

は怪訝に聞き返した。

王太子側近という立場に似合わず質素な執務室には、がちりと硬質な執務机と、来客用らしい三人掛けのソファが二脚とテーブル、びっちりと書籍が収まった本棚のみ。

機能的な調度品しかないという何とも物寂しい部屋だ。

その中では最も高価そうに見えるソファに腰を下ろしたウォークは、長い脚を組んでからローテーブルに書類を数枚広げた。

眉を寄せたまま硬直している光を見上げて鼻で笑う美人。

「何だ。茶の煎れ方も習っておらんのか」

「それくらい出来ます。そうではなく、何故私が貴方にお茶を煎れなければならぬのでしょうか？」

「お前が私の侍女だからだ」

「：私は侍女としての教育は受けておりません故、閣下にご満足頂ける物をご用意出来ないかと。本職の方が煎れるべきです」

「茶も満足に煎れられんとは。ドロ殿は一体何を教育されたのか」

こちらを挑発しようとしている。そんな見え透いた挑発に誰が乗るか、と光がそっぽを向いた瞬間、ウォークは軽く鼻で笑った。

「なるほど。減らず口と態度だけは一人前だな。それは魔術師殿の賜物か」

「ふっざけんな！」

「なに？」

「いえ？ 畏まりました。ご用意して参ります」

思わず日本語で悪態を吐く。問われたところで意味など教えはしないが。

ごまかせるとは思っていないけれど笑顔で押し切って執務室を後

にした。

「何だあの無駄美形！マジ美人の無駄遣い！！」

どすどすと足音荒く給仕場へと向かう光を、何事かと振り向くのは光と同じ衣裳の少女たち。耳慣れない言葉にも眼を丸くしている。だが、決して視線合わせようとはしない。賢明な判断である。

昨夜。モールの嘆息を聞き、きつとあの傍若無人側近が自分のことで何か言っているに違いないと判断した。モールのことだから、何とか自分で解決しようとしているに違いない。

問い詰めると案の定、早く光を侍女として寄越せと責め付けられている。だが、紹介した手前自分が断ってみせるとモールは言った。

「大丈夫、私行くよ。さっさと失敗して追い出されてみせる」

笑んで見せると、無駄だけはしてくれるなど、青い顔をしていた。無理じゃなくて無駄かい、とごちたのは言うまでもなく。

笑い上戸の騎士が予見した通りになったのが癪に障るが、モールの心労を思えば自分が動くしかないだろう。

ウオーク付きの侍女に教えられていた調理室に向かうと、台車に必要なものを用意してもらってそこを出た。調理人に見馴れない子だねえと声を掛けられ、笑顔で臨時ですからと答える。

今日明日にでも解雇されてやると決意を新たに、乱暴に台車を押し進んだ。窓掃除をしている少女が持つ雑巾を借りて熱湯の中に入れてやろうか、などとよく聞く嫌がらせの手を巡らすが、あの男なら危機を察知しそうな気がする。

それでも腹でも壊した日には…笑ってやるのに。

執務室に戻ると、笑い上戸騎士と見馴れない男がウォークの向かいに腰を下ろしていた。黒の短髪で僅かに釣り上がった金の双眸。がっしりとした体軀は騎士と同じほどに鍛えられているが、全身から漂う雰囲気は怠惰的で騎士のようには見えない。騎士には見えな

いがここに居るという事は高貴な身分なのであろう。そんな事よりカップが足りないではないか、と茶器を確認してみれば、何故が人数分ある。何故だ。あの調理人はエスパーか、と唸っているとおい、と声を掛けられた。

何だそのぞんざいな呼び方は、私はお前の嫁さんじゃない。

「こちらにも用意して差し上げろ」  
「畏まりました」

熱湯に雑巾の絞り水など入れないでよかった。無駄な被害者を生むところだった。

そっと息を吐いた光を、見馴れない男がぼんやりとした、だが強い眼差しで観察していた。

## 1-5 苦いだけの茶なぞ要らん!

この世界で一般的な茶と言えば、ハーブティのような香りの強いものである。煎れてもらっておいで何だが、香りが強過ぎて味など分かったものではないし、かなり濃くてどうかと光は顔を歪めた。

侍女の手順をじっと見ていたが、どうにも蒸らし過ぎの気がしたので時間を短くして勝手に容れてみた。

それでも苦味が強いので茶葉の量を減らしてみたが、今度は味も香りも薄い。ならばと甘味料と乳（こちらにも牛は存在したが牛乳は常時飲むものではなく、滋養強壯の薬として利用されており高価なものらしい。研究に没頭して寝食を忘れるモールの為にと、屋敷では常備されていて助かった）を用意してもらい、漸く好みの味が完成した。

それを飲んだモールも気に入り、屋敷では茶の用意は光の仕事である。

さて。その自分好みの味を、この男たちに披露すべきか否か。茶葉をいつも通りの分量で入れ、手を止め考え込んだ。

「変わったお茶の煎れ方するんだって？」

「え？」

騎士がにこにこことちらの手元を見ている。何故知っているのかと眼を丸くすると男はこちらの表情だけで答えを返してくれた。

「魔術師殿が褒めてたよ。ウォークに君を取られて何が困るって、君の煎れたお茶が飲めない事だって」

「ほう」



沈黙を守っていた見馴れぬ男が、にやりと笑んでそれは楽しみだと零した。囁くような声だというのによく通る。怠惰な空気とは裏腹に声だけは存在感に溢れていた。

いつもの手順で煎れ始めるが手元に注がれる男たちの視線が気になって仕方ない。見てくれるなど言いたいがそうもいかない。

「皆さんは甘い物平気ですか？」

「茶菓子程度なら食べるよ」

騎士は笑顔で答えてくれたが残りは何の反応もない。どれだけ甘くしても良いという事なのだろうなあ、ええ？などと柄悪く考えながらも、用意してくれた茶菓子からは甘い香りが漂っているので甘味料は控えめにした。

「ココを入れるのか」

最後に牛乳を煎れたところで男が眼を丸くした。

「はい。こちらでは栄養剤の一種だと伺いましたが、私の世界では普通に飲みますしお茶に入れるのも一般的です。お待たせ致しました」

出された物を怪訝に眺める二人に対し、騎士は直ぐ様手を付けて、美味しいと声を上げた。

「これ本当に茶？」

「そう、ですよ？」

「苦くない！」

やはりあの苦さは普通ではないのかと苦笑する。

「何故、あんなに苦いものを飲むのですか」

「元来眼を覚ますためのものだからな」

「眼を覚ますためにあんな苦いものを我慢して飲むなんて、意味が分からない…」

「君は違うの？」

「え？ああ、眼を覚ますために飲むっていう人も居ますけどね。普通お茶はお菓子のお供、一息入るっていう用途ですからねえ」

濃いコーヒーを眠気覚ましにというのは普通だ。だがこちらの茶はハーブティに似た味だというのに渋味ばかりが残って、本来の味も良さも失われている。

毒味が済んでいるからか、ウォークが優雅にカップを取ると口を付けた。む、と眉根が寄せられるのを見て、光はこっそりと拳を握る。存外に美味かったと言っているのが変化の少ない表情から見えて取れ、姑のように文句が言えずまあみると舌まで出してみる。

「お口に合いましたか？」

「……まあまあだ」

ふて腐れた声音に騎士は声を出して笑い、補佐官の鋭い視線に曝されるが気にした風もなく茶菓子に手を付けた。

何か、ちょっとだけすっきりした

光はこっそりとほくそ笑んだ。

## 1-6 怠惰的な王太子

「お前は飲まないのか」

「はい？」

三人掛けのソファに一人悠々と座っている男が、自身の隣をぽんと叩いて座れと促している。その向かいで男に向かって咎める視線を投げているウォーク。横の騎士はくくくと堪え切れない笑いを漏らしている。

ないわ、と光は首を振った。

「恐れ多いです、殿下」

男がぴくりと眉を跳ねさせたのを見れば、その呼び名が正しかったのだと証明され、軽はずみな行動を取らなくて良かったと光は安堵する。失敗してここを追出されるのは自分だけで、モールまで追出されては洒落にならない。

「何故？」

疑問だけをぶつけられ、光はそつと息を吐いた。何故分かったのだ、くらい最後まで言いましようねと心中でごちる。

「近衛隊長殿と王太子殿下の側近閣下。そしてもうお一方はと問われれば、王太子殿下としか答えようがありません」

「なるほど。ドロー殿が言うように多少は頭が働くらしい」

この野郎と心中で口汚く罵ってからにっこりと笑んで見せた。

「察しの通り、こちらはバライ王子だよ。見た目通り、身分とか気にしない方だから気にせず座って」

そうは申されましてもねえ

三人の視線をそれぞれに確認し、光は渋々とソファに腰を下ろした。同時に、側近閣下が数枚の書類をこちらへと押し出してくるの  
で、彼女は彼を見上げて真意を伺おうとするが、相変わらずの無表情で何一つ読み取れない。

諦めてそれらに視線を落としてから首を傾げた。

「…嘆願書ですか」

「どう思う」

「どうと言われましても」

三枚の嘆願書に眼を通す。地方農民たちによる税を下げてくださいという在り来りな内容が二枚に、もう一枚はその地方を治めている貴族が農民が税を納めなくて困っているので納税を待って欲しいというものだ。

「…この地方で早魃かんばつでも起こってるんですか？」

「いや。今年ほどの地域も豊作でな。この地方だけだ、このような嘆願書が届くのは」

「では、この貴族様が税金を倍にでもしてるんでしょうね。こちらの嘆願書には農民だけでなく、猟師や商人も入っているんじゃないですか？どこかに借金でも作っていて、国に定められた税に上乗せして徴収していると思いませんか」

この返答が正解だったのかウォークは僅かに眉を寄せた。こちらを試すような真似をして願った結果にならずさあみろだ。

「ではこちらは思う」

さらに差し出された物に視線を滑らせぎよつとする。

「これ：戦争する気ですか？」

「相手はな」

「こんな重大な書状、私が見て良いのですか？」

「無論、他言無用だ」

喋れば殺すぞと言わんばかりの視線で射られるが、光は僅かに肩を竦めるだけでそれを流した。

隣国から送られてきたらしい書状には、国境付近にある銀山は本来こちらの領土なので即刻権利を引き渡せという内容が記されている。光は疑問点を整理してからウォークへと問い掛けた。

「この国の戦力は我が国より上なのですか？」

「まさか。領土も三分の一程なら、軍事費なんか十分の一だよ？これで勝てると思ってるならどうかしてる。よっぽどな切り札でも持っていない限り、うちにこんな喧嘩を売ってくる訳がないんだ」

返してくれたのはウォークではなくマクであったが、光は特に気にする訳でなく書状をもう一度読み直してからふむと口元を手で被った。

「元々、この銀山はどちらの領土なのですか？」

「建国以来五百年は我が国のものだ。今更明け渡せなどとうかしているのだ」

忌ま忌ましいと零したウォークに光はさらに首を傾げた。

こちらの文章は英語を覚えるより単純で理解し易い。文法が日本語に近かったのも良かった。書き取りには不安があるが、読む事には問題ない。

この書状はこちらで覚えた知識を全て引きずり出しても、好戦的な文章にしかとれない。以前は隣国の領土だったのを戦争で奪ったというのならはこの文章も理解出来る。だが、五百年もの間黙っておいて、今更争う意味が分からない。

「大きな後ろ盾を得た。この国よりずっと恐ろしい権力に睨まれている。物凄い武器を開発した。或は…」

一度言葉を区切り、ふっと顔を上げた。真剣にこちらを見据えるのは三組の双眸。

「この国を敵に回しても得たい物が、銀よりずっと価値のあるものがここにある」

その言葉に王太子はくつと肩を揺らして笑んだ。

## 1-7 そして勇者は幸せに

この書状の裏に潜む何かを読み取るのはそれほど難しい事ではない。だがそれは、この世界の情勢を知っていればである。異世界とやらから現れた、十代半ばの少女が考え至るものではないはずだ。自分の身分を知って、物怖じせず答えるというのも面白い。敬った様子も畏怖する様子も全くない。

自分に寄ってくる女と言えば、次期王妃の座を狙う欲に塗れた化粧の厚い者ばかりだ。そういう女の相手はうんざりするほど面倒である。

こちらの身分を知らながら胡散臭いとばかりに自分を見る少女の思考は不可解だが興味深い。

王太子はゆっくりと脚を組み替えて、こちらの反応を探るように見ている少女にうつすらと笑んで見せた。

「で？ 何があるんですか？」

こちらの反応で確信を得たらしい彼女はじっと王太子を見据えてくる。その双眸には何の迷いもなく答えを待っていた。

王太子はくつくつと笑いながら懷から箱を取り出し、彼女へと投げて寄越す。

「殿下！」

「いい。こやつの見解が聞きたいのだ」

ウォークの咎める声も飄々と流し、箱を開けると視線で命じる。これだから命令し慣れた人間は嫌なのだとごちながらそれを開けた。小さな箱の割に結構な重量があると思えば、中には錆びた色の鉄の塊。

「：フチーレ？」

「なに？」

「え？だから銃フチーレではないのですか？絵本で見ましたけど」

首を傾げた。発音が間違っていただろうか。子供用の絵本だったと思うが、確かに銃フチーレと描いてあった。

絵本の内容は勇者が銃で悪魔を退治したというものだ。悪魔を退治した勇者は、村の美しい娘と結婚して末永く幸せに暮らしましたとさ、と桃太郎みたいなものと納得し、こちらにも銃火器はあるのだと思ったのだが、三人の反応を見るとそうではないらしい。

「お前の世界の物か」

「え？」

「お前の世界では誰もが知る物なのだろう。銃は」

「えーと、まあ。知ってはいますが、見るのは初めてです」

日本ではドラマなどで当然のように見るが、一般市民が実際に見る機会は皆無と言っていいだろう。友人（女）が持っていたサバイバルゲーム用のエアガンは触った事があるが。

他国では違うが、日本で所持しているのは公言出来ないような職業の方か警察官くらいだろう。

恐る恐る手にとってみて、光はぎょっとした。

「イタリア？！」

グリップの下にはしっかりと「ITALY」と彫り込まれている。どういうことだと王太子を見遣れば、彼はにたりと笑っていた。

「やはり、同じ世界から来たらしいな」



「だから、誰と?!」

自分の世界への手掛かりが僅かに見えた気がした。この半年、必死に探してきたそれは僅かな糸口さえ見付からず、半ば諦めていたものである。

どくりどくりと音を立てる心臓をごまかすように光は声を荒げたが、言葉が続けたのは王太子ではなく補佐官であった。

「それが銀山に隠された真実だ」

だから分かり易く言え!と光が叫ぶ前に言葉が続く。

「銀山には、イタリア人が隠れ住んでいる」

もう百年以上にもなるか、と続いた言葉に、光は希望と絶望を同時に味わった。

## 1-8 勇者とイタリア人

ロード国と隣国には大きな山脈が存在しており、数百年前よりその頂上を国境としてきた。件の銀山は麓に近い場所にあり、その所有を争った事など過去に一度もない。何より、その銀山には僅かな資源しかなく、とっくに廃鉱となっているのだ。

「その銀山に不思議な集団が現れたのは、百年ほど前のことだ。その銃や見たこともない武器類を抱えた言葉の通じない男たちはそこに住み着き、当時の国王、三代前の国王に越権を求めた」

「そんな胡散臭い奴ら、本来ならお目通り出来る訳ないんだけど、彼等は門番の目の前で空を飛ぶ鳥を撃ち落とした。魔法だって言っ  
て、門番は慌てて彼等を確保した。そんな能力を持った魔術師なんて、見たことなかったからね」

言葉を理解していくうちに光が最も肩を落としたのは、魔術師というのは魔法使いではないという事だ。どうかと言えば化学者のようなもので、世界の理を研究したり、ある者は呪いを研究したりと胡散臭い。箒で空を飛んだり、炎を操ったりなどは失われた力と言われ、その力を継ぐ者は居ないらしい。

お伽話の魔術師ならば城に招き入れ、抱え込むのが当然だとばかりに当時の宮廷魔術師に引き合わせたが、彼等はたどたどしい言葉で「これは魔術などではない」と主張する。ではなんだと問えば、国王と会わせて欲しいの一点で話しにならない。

「当時の国王はバライ殿下のようにのらりくらりとした方だったらしくて、あっさりとお会いになったらしい」

近衛騎士の言葉にも本当緩いと頷く光にも王太子は気にした風はなく、王太子は銃を懷にしまい込んだ。

「彼らは麓の村でこの世界の言葉を覚え、どうやら異世界に迷い込んだらしいと結論付けた。彼らは最低限の保護を望み、必要以上の接触を望まないと主張した」

「勝手なものだな異世界人とやらは」

ウォークの言葉に、それは私も含まれるのだろうかおい、と日本語でこちた。

「彼らは戦争の真っ最中だったんだって。戦場でいつ果てるとも知れない諦めた命が、ここではそうでないとなればゆっくりと生きたと思うのも当然。ただ、彼らは男ばかりだったから、仲良くなつた麓の娘たちとの婚姻は許して欲しいと主張した」

子孫を残したいというのは生物なら当然の欲求で、無理矢理でないのなら勝手にしろと国王は許可した。引き換えと言っては何だが、と国王は銃と彼らの知識を所望し、彼らはそれに応じた。

「彼らの存在を知るのはごく僅かの限られた者だ。お前が読んだ本というのは国立図書館の閲覧禁止の物だろうな」

係は一体何をしているのだ、と嘆息した美貌の補佐官に光はうぐと息を飲み込む。モールの許可証を持って初めて訪れた日に確かに注意されたのだ。

職員の若い男性にそちらは閲覧禁止だからと入らないようにと言われたが、閑散とした図書館は他に人が居るでなし、職員たちは入口付近でせつせと仕事をしていたので素知らぬふりで閲覧禁止の部屋に入った。

入るなど言われれば入りたくなるのが人の性。ずらりと並ぶ歴史書の中に版の大きな絵本があれば目につく。何故こんな所にと首を傾げたが、それがまさか異世界から来た人間を描いたものだとは考え及ばなかった。

「五十年前に出版と同時に回収・破棄され、現存するのはあれっきりだ」

「じゃあ、銃なんて単語は存在しない訳ですね？」

「イタリア語らしいよ」

聞いた事なかったと問われても、英語もままならないというのにイタリア語など分かるものか。

「その：イタリア人の方々に会わせて頂く事は出来ますか？」

「さあてな」

王太子が補佐官へと視線をやると、彼は深々と息を吐いて光を見据えた。

「この国で銀山の真実を知る者は両手の指で足る程だ。勿論、ドロ―殿も知らん」

「でも君は同じ世界から来た訳だしね」

「短絡的に物を言うな」

「はいはい」

窘める言葉に騎士は肩を竦めて見せたが反省した様子はない。

「問題は、何故、彼らの存在が隣国に漏れたかという事だ」

「イタリアの方々が、銀山から出ちゃったとかじゃないんですか？」

「それしか考えられんが彼らからは何の報告もない」

ふう、と補佐官が何度目とも分からない嘆息を零したのを見て、王太子はああ、と声を上げた。

「お前が会いに行けば調度良いのか。彼らも話し易かろう」  
「殿下！」

これ以上、頭痛の種を増やしてくれるなと叫んだ補佐官に、光は初めて同情を覚えた。

## 1-9 三人寄って悪巧み

同じ世界を生きた人は存命ではないだろうが、百年以上この世界で生活してきたイタリア人たちには是非とも会いたい。だが、王子、いや、補佐官殿の許可がなければそれは不可能であろう。

どうやってこの冷静沈着な男を領かせるか。考えを巡らせるが良い方法は思い付かない。

「結局：これをわたしに見せて、どうしたかったですか？」

僅かな変化でも感じ取ろうと碧の双眸をじっと見詰めるがそれは何の変化も見せなかった。代わりにひどく楽しそうな王太子の声が満足そうに答える。

「お前がどこにたどり着くか見たかった」

にたりと笑んだ王太子は、懷から取り出した書状を補佐官に渡す。それを見た補佐官はさっと表情を変えた。

「お前が使えるそうで良かった。話を進めて良いぞ、ウォーク」

「しかし殿下！」

「お前が言い出した事だろうが。モールの隠し子だとしても触れて、お前かマクの所にでも縁組させれば良いだろう？」

「いいねえ妹。俺も母上も歓迎するよ」

「いもうと？」

うちにおいでよと言われた少女は、全く話の見えない展開に眉根を寄せた。自分への説明もなしに、勝手に話をまとめようとするな。

「一体何の話ですか」

「お前に確たる身分を与えようとしているのだ。どちらの妹が良い？」

「…なんで？」

今までの流れで彼らの妹になる要素がどこにあったのだろうか。これが一部で流行っていた妹萌えってやつか、と見当違いの結論を導き出してからいや違うからと自分自身で突っ込みを入れた。

「何故わたしに身分が必要になるのですか」

「お前がおれの正妃になるからだ」

せいひ？

「せいひ？」

脳内で上げた声をそのまま口にして、こてん、と首を傾げる。

初めて見せる年頃の娘らしい仕種に可愛いなあと騎士が声を出したが、光はそんな事に構っている余裕はなかった。

「やれどこの姫だのうちを娘をだのはうんざりだ。お前なら慎ましい正妃であると同時に良い側近になれるだろう」

「正妃！」

カチン、と導き出した答えに、光は悲鳴を上げた。

「何で！何でわたしが？！正妃って事はあんたと結婚するって事でしょう？！」

王太子に向かってあんたとは随分な暴言だが、言われた本人は全

く気にせず笑っている。

日本語で頭おかしいんじゃないの?!と叫ぶが、言葉が通じないだけに更に気にした様子はない。うむ、と妙に重々しく頷いて見せた。

「そうだな」

「嫌だ!冗談にもならない!っていうか、わたしみたいな素性も知れない女と結婚なんて王子さまが?!」

ないないない!と叫んだ光の反応に、補佐官がにたりと笑んだ。これは面白い反応である。次期王妃になれると言うのに、それを蹴ろうと言うのだ。その無欲さ(寧ろ迷惑がっている)はそういった欲を嫌う王太子の支えになるだろう。

これは思った以上に良いものであったらしい。

「そうですね。私の妹ならば身分も問題ないでしょう。微かにもない品位も、うちの侍女長に指導させれば問題なく…」

「拒否!断固拒否!」

さりとけなされているが、そんなことを気にしている余裕は今の彼女にはない。

「何語だそれは」

「何で? いやほんとありえないし!」

血相変えて慌てふためく少女を楽しげに見詰める三組の視線。

王太子は肩を揺らしながら立ち上がり、行儀悪く残りの茶を飲み干すと茶菓子をお口に放り込んだ。

「おれはそろそろ執務に戻る。後の処理は頼むぞ」



「はい」

「じゃあ、俺も。またね、カリイちゃん」

一応は王太子着きの近衛騎士である。マクも腰を上げ、部屋を出ようとしたが、そうだと呟いて光の横まで戻って来た。腰を折って動揺したままの光を覗き込んだ。

無駄のない動作で下りてくる柔らかな笑み。

「何かあったら寄宿舍までおいで。いつでも相談に乗るから」

薄い茶の双眸がゆるゆると細められ、厚めの唇が弧を描く。それが額に落ちてきて、僅かな熱と柔らかさを呆然と味わった後。

戸が音を立てて閉められ、我に返った光は盛大な悲鳴を上げた。

## 閑話・王太子の玩具（前書き）

1ー9から数日後の話。三人集まると補佐官の影が薄くなるのは何故でしょう。

## 閑話・王太子の玩具

「お三方は身分が違うのに、随分仲が良いんですね」

補佐官の午後休憩を見計らったようにやって来る王太子とその警護という名目で現れる騎士。暇か、と毎回心中で突っ込んでいる光は、気になっていたことを口にして三組の視線に晒された。

騎士が面白そうにくつくつと肩を揺らして笑う。

「俺の母親がウォークと殿下の乳母でね。ウォークの遊び相手になつてた俺が、そのまま殿下も面倒見てた」

その言葉に聞き捨てならんとばかりに、補佐官がちょっと待てと声を荒げた。

「私に面倒を掛けていた…いや、掛けているの間違いだろう」

「何言ってるの。勉強が嫌だって泣きついてきたり夜一人で眠れ…」

「煩い黙れ。お前と殿下が起こした悪行の数々、それを後始末してきたのは誰だと思っている。黙っていてやったのを伯母上に報告しても良いのだぞ」

「あ、いや何というか早まるな、俺が悪かった」

「ウォークその辺で勘弁してやれ」

「貴方ですよ」

助け舟を出したつもりが矛先を向けられて王太子は肩を竦めた。

なるほど腐れ縁というやつか。

一人納得した光は関係図を整理する。

「騎士様が年長者で」

「マクね、マク・サルク。俺が二十四でウォークが二十二。殿下は十八」

騎士様と呼ばれるのが気に入らないのか、親しげな笑みで自分の名をアピールしてくる騎士に言葉を遮られて僅かに口元を歪めたが、直ぐに口角を上げてそうですかと頷いた。

「王太子殿下の乳母をされるくらいだから、騎士様も良い御身分の出身なんでしょうね」

だが、その主張をあえて無視する。そうして笑顔で毒を付け足す。

「うん、まあ。三男だから爵位は継がないけど一応伯爵家だしね。母親は元女官長で内部に精通してるし信頼厚いから、選ばれたというのが大きいだろうけど」

「厭味を言われているのにそのまま流せるその図太さよ」  
「え？なに？」

思わず日本語で発した言葉を聞き返されるが勿論笑顔で、何でもございませんと受け流す。

この図太いさはなかなかのものだ。

これなら王宮に蔓延る、ドロドロの愛憎劇を繰り広げている兵たちを平然とあしらえるだろう。騎士はよく女性に言い寄られるらしいが、面倒臭さそうなのはさらりと流し、割り切った関係を作れる女性のみと付き合うらしい。

そのスキル、わたしにもください。この兵どもを蹴散らすスキルを。

うむうむと頷きながら空になった自分のカップに茶を注ぐと、王太子が無言で自分のカップを差し出してきた。

この野郎お前の口は飾りか、と罵りながらも笑顔を向ける。

「何でございましょう」

「…注いでくれ」

「畏まりました」

カップに注がれていく茶と、それに視線を落とす少女をじっと見下ろす。ここ数日、コルト公爵家侍女長に鍛えられている成果が出ているのか、持ち合わせていた凜とした空気が強くなった。そうして、王太子である自分に真っ直ぐ挑んでくる強さ。

「……何の心配もなく、女狐どもの群れに放り込めそうだな」

「女狐って。というか放り込まないで下さい」

むっつりと唇を尖らせた少女に王太子はにたりと笑んで見せた。

「おれの妻は頼もしいな」

「なりません！」

「まだ言うのか」

「いつまでも申し上げましょうとも！」

ぐっと睨めつけてくる少女に、軽快な声を上げて笑うと、注がれた茶を飲み干してから彼女の頭をぐりぐりと撫で付ける。さらさらと流れる黒髪。意思の強い黒の視線が気安く触るなど雄弁に語っていた。

そう嫌がられると構いたくなるのは自身があまのじゃくだからか、少女の反応が初で面白いからか。

少女の手を取って、思いの外ほっそりと長い指の付け根に口付ける。

「ではまたな嫁御」

「〜！この！」

瞬時に赤くなる少女の反応に気を良くした王太子は、午後の執務も終始機嫌良く、面倒だと逃げ出す事もなかったので補佐官の機嫌も上々であったとか。

## 閑話・お兄ちゃんなんて大嫌いなんだから！

きっちり計量して作ったマドレーヌもどきをモールへと届け（何分、小麦と卵以外の材料が代用品であったので、そっくり同じ味は作れなかった）その帰りに声を掛けられた光は、作ったばかりの笑顔を困惑に変えた。

「ねえカリイ、かの御三方とお会いしたって本当?!」

「かのおさんかた?」

ドロー家の調理人である見知った女性に問われた光は、ゆっくりと女性の言葉を繰り返して首を傾げた。

自分好みの茶を煎れようと奔走していた光は、牛乳を入手する際に彼女に世話になったのである。

それから親しくしていたが、この様に興奮している姿を見るのは初めてだ。

興奮気味の彼女は御三方よ!と叫びながら片手に持った棒状の野菜をぶんぶん振り回している。地球では存在しないであろう不可思議な野菜だが、硬い刺と皮に守られた食用部分は美味ではある。武器にでも使えそうなそれに光はヒヤアと色気のない悲鳴を上げた。

「待って、危ないからそれ! 刺さる刺さる!」

「え? ああ、やだ」

はしたない、とでも言うように、彼女は自身の背にそれを隠すが今更である。

「何そんなに興奮してるんですか。御三方…って、ああ、あのぐだ

ぐだトリオか」

後半は日本語で呟いて、言葉が通じないって便利だなあとごちる。

三人のやり取りを思い出すとぐだぐだは二人だけで、一人は怜悯な男だが引きずられてぐだぐだになっていた。一対一ならばあの男に勝てないかも知れないが、二対一ではあのぐだぐだ二人には勝てない。

少しだけ同情したのは内緒だ。

「ウォーク様に召し上げられたって聞いたけど！」

「召し上げ…いやあ、まあ。あんまりそういう言い方は勘弁して下さい」

え？なんで？と首を傾げる彼女に答える事はせず、辺りを見回して他に人気がないのを確認する。

「あの人達って、三人セットで有名なんですか？」

「そうねえ。幼い頃から三人ご一緒に、それぞれ身分も見目好い方でしょう？やっぱり噂の的なのよ。で！で？！」

「で？」

「お話したのでしょうか？羨ましいわあ」

「はあ…」

あの三人のどこが良いのか、光にはさっぱり分からない。

次の国王である王太子は、容姿は男性的に整っているし身分は申し分ない。

だが、あのやる気ない怠惰的空気は、統率者に向くものではない



し、あんな恋人・配偶者など考えられない。現代日本では絶対に生きていけないだろう。

その補佐官であるウォークの母親は王太子の伯母にあたる。つまり二人は従兄弟同士で、彼自身は王族の血を引きコルト公爵家の後継ぎらしい。容姿は恐ろしいほどに整っており、文句を付けるとすれば完璧過ぎて人間味のないところか。

彼の欠点を上げるとすれば、その性格の悪さだと光は胸を張って言える。

近衛第二隊隊長であるマクは伯爵家の三男である。爵位を継ぐ事はないが王太子の信頼厚い。がっしりと男性的に整ってはいるが他の二人に比べれば親しみやすい容姿であるのも良いらしいが、親しみやす過ぎて、けらけらと笑うあの軽率な空気は如何なものか。

三人それぞれに文句を着けられる者など中々居ないというのに、光はそれを易々と口にして顔をしかめている。

「：カリイの理想って高いのね？」

「違うよ！普通！普通が良いって思わない？！」

「贅沢だねえ」

何の前触れもなく掛けられた声に光は飛び上がるほど驚いた。声の主はここ数日で聞き慣れた男。

「騎士様…心臓に悪いから勘弁して下さい」

「普通に声掛けただけなのに」

「可愛く言わないで下さい。気持ち悪い」

そのやり取りに調理人は心中で悲鳴を上げた。

近衛隊長という身分はそれほど身近なものではない。彼女自身、モールの屋敷着きになるまでは王宮調理室で働いていたが、マクと会話した事などなかった。他の貴族とは比べものにならない程に碎けた男だが、それでも調理人が気軽に話せる相手ではない。

そんな彼に対して気持ち悪いなど物凄い暴言で、彼の身分ならば切って捨てても咎められないだろう。

だと言うのに。

彼は心底楽しそうにけらけらと笑い声を上げ、彼女が身を案じている光は嫌そうに歪めた表情を更に歪めている。

「で？我々の誰が好みかって話だっけ？」

「どれも。誰も好みではありません。そもそも、そんな話ではありません。さっさと仕事に戻ったらどうですか？」

「冷たいな、妹になるかも知れないのに」

「なりません！」

「やっぱりウォークの妹に」

「ならんつつてんだろうが！」

怒鳴られているというのに嬉しそうに声を上げて笑う騎士に、こいつはマゾかとごちる。人を怒らせて喜びを覚える人種をマゾと言うのかは光には分からないが、彼は変態の枠に入れておく。

「あーやっぱりカリイは面白いなあ」

「わたしは面白くありません。さあさあ！仕事に戻る！隊長が仕事サボってどうするんですか」

「カリイの煎れたお茶が飲みたくて抜けて来たのに」

「帰れ！仕事しろ！」

ぐいぐいと背を押されても笑みを崩さない。

喧しい二人に存在を忘れられ、二人の背が遠ざかって行くのを呆然と見送った彼女は、我に帰った瞬間に顔見知りが居る調理室へと駆け込んだ。

その日から、光が好奇と嫉妬に塗れた視線に晒される事になったのは報告するほどの事でもない。

## 2-1 鬼教官が現れた！

あうあうと。

唇を震わせ声にならない悲鳴を上げ続ける。

「そのまま動いてはなりません」

いや、動けませんかと返す事も出来ない。

「顎を引きなさい。視線を下げない！表情！」

「む…」

「む？」

「無理っ！！」

頭に乗せられた書籍を投げ捨て叫ぶ。力の限り。

その行動を冷ややかに観察してから落ちる溜息に光は頬を引き攣らせた。

「拾いなさい。一からやり直しです」

「いや、何で」

「おだまりなさい」

ぴしゃんと言い渡されるがそこで引くような可愛い神経はしていない。にっこりと笑んで、一冊の書籍を拾い上げた。分厚い辞書のようなそれだけで結構な重さがある。それを、彼女の胸元に押しやって視線だけを鋭く刺した。

「わたしはこんな事望んでいない」

「貴女に拒否権はありません。これはウォーク様が、バライ殿下が

望まれたこと。貴女が何を言おうとわたくしには関係ありません」

五十は超えているだろう彼女、コルト公爵家侍女長、アクナ・カッセはしゃんと伸ばした背を一度も曲げる事なく残りの書籍を拾い上げ、硬直している不出来な生徒の頭上に乗せた。光より随分と小柄なのでかなり無理をしながらであったが。

「さあ、続けますよカリイ」

「だから！これを三冊も乗せられたら首が悲鳴を上げてるの！鞭打ちになるっての！」

「わたくしに伝わらない言葉を口にしない！貴女は何処の産まれですかっ！」

「っ！もうやだっ！！」

カッセ女史は手にしていた鞭を、遂に光へと振った。ピシャンと派手な音を立てた割にたいした痛みは感じないが精神的に辛い。

光のわたしは馬じゃないという叫びも完全に無視し、侍女長は光の手に並々と茶が注がれたカップを持たせた。

鼻につく濃い茶の匂いすら苛立ちを生み、光はただひたすらに心中で助けを求める。

「一滴でも零せば、賢いと評判の貴女ならどうなるかお分かりですね」

「鬼！鬼が居る！」

光の叫びは完全に無視され、数分後には再度肩をびしりと叩かれる事になる。

「うえええ。鬼だ。あれは鬼だ！先生！この王城には鬼が居るよ！」

「うむ。まあ、あれだ落ち着け」

一日拘束された光は今までにない程に疲労し、屋敷に戻るなりモールの執務室のソファを陣取った。べったりと寝そべると恨み事をずらずらと並べたてている。

身体中がみしみしと軋んだ悲鳴を上げており、こんな苦行がいつまで続くかなど考えたくもない。

「何でわたしがこんな目に…」

「予想外だったなあ」

「ひどい！ひどいよ先生！何ですか正妃って。王様って病気がちだから、王子が結婚したらすぐにでも即位するのが決まってるってさ、わたし女王様ですよ！」

「いや、女王は女の王であって、カリイは王妃…」

「それじゃなくてもあんなのが夫だなんて！家事は手伝わない、子育ても勿論手伝う訳がない！」

子供の学校行事なんて一度も顔を出さず、あら、甲田さんとか母子家庭なんでしょ？大変ねえなんて言われるんだ！

休日も子供と遊んであげる訳ないし、子供が父親の絵を描けば家で寝ているものばかり！」

ああなんて不憫な我が子！と叫んだ光に対して、いやまあ何が言いたいのかさっぱりだとモールは首を傾げている。同じ年頃の娘より随分としっかりして賢い娘だと思っていたが、ここまで喧しい気

性をしているとは思わなんだ。それともこの状況がそうさせているのか。

「先生、あの鬼どうにかして下さいよお」

「カッセ女史は私も苦手でなあ。怖いよなああの人」

「そう！超スパルタ！鞭ってなに鞭って！」

王太子に光の処遇を任された補佐官は、呆然としたままの彼女を連れて自分の屋敷へと戻った。

彼の両親が住まう本宅は王都ではなく、その隣に与えられた領地にあるのだが、彼自身はコルト公爵家が国王から与えられた城内の屋敷に住んでいる。本宅の侍女長であるカッセ女史は「坊ちゃん」の教育係でもあった為、本宅ではなくこちらの屋敷に住んでいた。

屋敷に連れて来るなりカッセ女史に引き合わされた光は、残りの時間を鬼の特訓に費やしたのである。

「そもそも、あの無駄美形のこれを見れるようにしてくれて台詞は何ですか！」

「いや、私は聞いていない訳で」

「すみませんねえ見れたもんじゃなくて！あの御綺麗な顔が基準なら、ほとんど見れたもんじゃないでしょうねえ。ああ可哀相！そんなに理想が高かったら絶対結婚なんか出来ないんだから！」

「まあカリイ落ちっ」

「王子も王子だ！あんな王子だと先行き不安！先生！国を出るなら今のうちですよ。わたし的には海に向こうにあるムタタ大陸がオススメです。今後あの大陸にある国は発展が期待され、先行投資にはもってこい……」

「待て待て待て！落ち着け！」

「落ち着いて考えた結果、この国に見切りをつけるべきと判断しました」

「…お前の思考回路を覗いてみたいものだ」

「ごくごく普通ですよ」

どこがだ、とは突っ込まず、モールは盛大な嘆息を落とすだけであった。



## 2-2 宰相が現れた！だが、存在感がなかった！

その日補佐官の執務室に現れた王太子は、普段とは様子が違っていた。

まず、訪れる時間が早い。いつもならばお気に入りの少女が午後の休憩に茶を持って来るのを見計らって現れるというのに、今日は朝一番、ウォークが執務室の扉に手を伸ばした瞬間声を掛けてきた。更には彼の後ろに控えるのは護衛で腐れ縁のマクではなく、しかもつつらをした宰相閣下。枯木のような老人は薄緑の双眸に強い光をのせて、じっとこちらを見上げている。

何事か、と整った眉を寄せた。

「今日の予定はどうなっている」

「午後から謁見の予定が二件入っております」

「午後か…」

「それまでに対策を立てましょう」

「対策とは」

執務室に入ると宰相がしっかりと扉を閉める。どかりとソファに腰を落とした王太子が深々と息を吐いた。

「父上が面倒な告白をした」

それはそれは嫌そうに吐かれた言葉にウォークは表情を凍らせる。

「おれに姉が居るらしい」

ここに宰相の姿が無ければ、暴言を吐いて頭を抱えていただろう。既にいくつも問題を抱えた現状で、そのうち一つも解決していない

というのに更に大きな問題を抱える羽目になるとは。

「補佐官殿は魔女をご存知か？」

「魔女でございますか」

魔女とはまた何を言い出すのかと思いながらも宰相の言葉に小さく頷いた。

この世界にはかつて魔術師、魔女と呼ばれる者が居た。精霊や自然の力を借りて火や水を操ったと言われる彼らの力は随分前に失われている。

宮廷魔術師という地位を与えられたモールでさえ、蠟燭を点す火さえ操れないのが現在の魔術師たちだ。彼らのほとんどは魔術師や魔女の家系で、過去の遺物である魔術を研究・解明することを生業としている。

「二十年前までこの城に魔女は存在していた。噂くらいは聞いていないかな」

「魔女：ただの噂ではなかったのですか」

「紛れも無い事実だ。彼女は美しく聡明で、そして自然を操る強大な力を持っていた」

「そしてその魔女が父上の子を産んだ。その子供が女であろうが、争いの火種になるのは面倒だ」

あのくそ親父、と。この国で最も地位と権力を持つ国王に対し悪態を付いた王太子にウォークは問い掛けた。

「何故今更、そのような話が出てきたのですか」

久々に感じるひどい頭痛の種類は覚えがある。これは面倒事が起

こる前触れに違いないのだ。勘弁してくれ。

「魔女に娘が居ることが分かったのは昨夜だ。魔女を迎えに行ったが、魔女は既に他界しておりその娘が跡を継いだという。その娘とやらを連れて戻ると連絡が入った。

魔女はその娘を、城を出て直ぐに産んだ。それを知った父上は自分の娘に違いないと、死ぬ前に会いたいのだと言う。本当に迷惑な話だ」

美しく聡明な魔女と恋に落ちた国王。魔女は自分が身籠った事を知ると、身分や政治的な事を案じて自ら身を隠したのだろう。

「その娘は…どのような類の娘か、お二方はもうご存知なのですか」  
「お前の婚約者殿が連行している。報告によると、とても成人しているようには見えない。十五、六に見える小生意気な小娘らしいぞ」  
「リリイが…」

「補佐官様に婚約者?!」

リリイですって!と背後から上がった叫びに三人は一気に振り返った。朝の茶を用意してきたらしい侍女が顔を引き攣らせている。

「どんな物好きですか?!」

「黙れ」

この少女の反応ばかりは予測が付かない。王太子は楽しそうに笑っているが、宰相は見慣れない少女に警戒心を向けている。それを紛らわそうと宰相に大丈夫ですよと声を掛けた。

「これが先日お話した殿下の婚約者候補の娘です」

「何をおっしゃるか!」

宰相の言葉を遮って悪態を吐こうとする少女を視線だけで黙らせると、いつから聞いていたと問う。

「ノックしましたが返事が無かったので開けさせて頂きました。開けた瞬間、殿下がお前の婚約者がくとおっしゃったのでそりやもう驚きまして。

聞き間違いか、わたしが知らぬ似た発音の単語がまだあったのかと、五度は言葉を反芻しました」

ええ、耳がおかしくなったのかと思ったほどです、今でも信じられませんが続けた少女はうんうんと頷く。

ウォークはむつつりと口元を歪めた。自分の家柄ならば産まれる前から婚約者くらい居てもおかしくないのだが、この娘の反応はどういう意味であろうか。

「驚くほどのことではあるまい」

「いくら婚約だけとは言っても、補佐官様がお相手なんてどんな物好きかドMかのどちらかと」

「分かる言葉を使え」

「同じ意味がこちらには存在しないので」

語尾を上げてにこりと微笑む。どうせろくでもない言葉なのだろうが。

「嫁御」

「……」

王太子の呼び掛けに、誰の事でしょうと言わんばかりの素知らぬ顔を張り付ける。

全く強情な娘だ。

「カリイ」

「はい！何でございましょう！！」

ころりと態度と表情を変えた光に向かって、茶を煎れたら下がってくれと命じた王太子は、彼女の手元を見ながらぽつりと声を落とした。

「代わりに王位を継いでくれれば楽なのだがなあ」

「殿下…」

宰相と補佐官が嘆息と共に吐き出した声はひどく疲労したものであった。

## 2-3 天使が現れた！光は悪巧みを覚えた！

鬼教官は日に日にその鬼っぷりを上げている。あれはもう鬼の域を超えた。神レベルだ。

そんな事を光はつらつらと考えながらウォークの屋敷からの長い帰路を歩いていた。公爵家の屋敷ともなると城の中枢近くにあり、城門近くにあるモールの屋敷とは随分と距離がある。

身体はぐったりと重いし、精神的疲労も限界に近い。背を丸めとぼとぼ歩きたいところだが、ここ数日叩き込まれた作法が身に付き始めたらしい。背は自然と伸びたままだし足運びも隙なく綺麗に見えた。

「このままではあいつらの思い通りになってしまう…！」

ああ嫌だ、と唸り声を上げた光はいくつか考えた策に思いを巡らした。

手っ取り早いのは身を隠す事だが、何をするにも資金が必要だ。小遣い程度は貰っているが使う所がないのでほんの僅かだし、勿論部屋を借りるだけの資金はない。

切羽詰まったらウォークの屋敷にある、やたら豪華な装飾品の一つでもくすねてやろうとは思ってはいる。

「後は…」

誰にも迷惑を掛けず、我が身を護る方法がある。それには必要なものがあるのだが、と考え込む時の癖で足元に落ちていた視線を上げた。

そして、光は息を飲み、感嘆の声を上げた。

「うっわあ…」

目の前に天使が居た。

雑誌で見えるような外国人の女の子。ふわふわの柔らかな金髪に透き通るような白い肌。ぱちりと大きな双眸は淡い藍色。簡素なワンピースから伸びる細い手足は高級なビスクドールのように煌めいている。

「うっはああ！」

「え？え？なに？！」

光は奇声を上げてわきわきと指を動かしながら天使に近付いた。その奇行に眼を大きく見開いた天使がずりずりと後退る。何だこの子。怖い。眼が怖い。

後退るより早く光が天使の手を取った。ほっそりと長い指から一瞬にして血の気が引いていく。

「貴女、王妃になりませんか？！」

「……は？」

ぽかん、とした表情。愛らしい顔に似合わぬ低めの擦れた声が、夕闇に溶け込んでいった。

「いやゝ本当可愛いですねえ」

「いや、怖いから。離して」

目の前で怯える、いや怯えるというより鬱陶しいと言わんばかりの天使に向かいへらへらと笑ってはいるが、握った手には力を込めた。離してなるものか。これは自分が解放されるために必要な人材なのだ。

「いやあゝ貴女みたいな美少女が、王妃さまだなんて国民は大喜びですよ！」

「いやだから、王妃なんてなれないから。そんな身分じゃないの」

「いやいやいや！その小さく可憐なお顔！全身から滲み出る気品！まさに良家のお嬢様！」

わたしとは雲泥の差！と叫んだ少女をじっとりと見下ろしてから、天使はそつと息を吐いた。

「で？」

「で？」

問われ、光はきよとんと首を傾げた。

「おれを王妃に据えて、君に何の得があるの」

一体君は何者で何がしたいのか、澄んだ双眸がそう問い掛けてきて、光はごくりと喉を鳴らす。

自分をおれと呼ぶなんて、反抗期でちょっとツンな女の子。



これだけ綺麗な少女ならば蝶よ花よと大切に育てられ、のほほんとした世間知らずなのだろうと勝手に思い込んでいた。だが、その双眸からは自分のそれと似た強い意思を感じる。口先で思い通りに動かせるような部類ではない。

光は観念するとゆっくりと口を開いた。あの男どもの目論みを暴露するため。

「実は」

信じてもらえるとは思えない、異世界から来たという事実は綺麗に隠して。

## 2-4 麗人が現れた！光は混乱した！

「さいっ」

それまで無言で話を聞いていた天使が、ひどく冷えた表情で口を開いた。

「てえ！」

吐き捨てられた言葉には侮蔑の色が濃く現れており、光はそれにうんうんと頷いて同意した。

「何なのそいつら。特に王太子！自分の縁談話が面倒だからって、慎重しくて頭の良さそう君を王妃に？ばっかじゃないの！？」

「えっと、それはどういう意味合いでの馬鹿……」

「君も君だよ！ちゃんと拒否しないから、そいつらが増長するんだろ？！」

ずいとい綺麗な顔に詰め寄られて光は頬を引き攣らせた。可憐な顔と身体に似合わず、天使の背はひよろりと高い。日本人女性の平均身長より僅かに高い光より頭一つ分高い。

美少女に見下ろされるともの凄い迫力だ。

「いやあごもつともで」

妙な迫力に押されて光がへらりと笑えば天使はそうだよときつく睨めつける。

「だから、貴女みたいに王妃の品格を持った子に」

「おれが王妃になれない理由があるんだけど、国家機密だから言えない。言えないけど絶対に無理なの」

なんだそれは、と光は心中で突っ込み、ぷいと横を向いた天使をじつと観察する。

真実は定かではないが国家機密を抱える絶世の美少女。後数年もすれば、傾国の美女と呼ばれるようになるだろう。

これはやはりなにか使えるのではないか？今は手を離すべきでない、と光は導き出した。

「では、お友達からお願いします！」

「え？なにそれ」

「王妃を前提としたお友達」

「いや本気で意味分らないから」

天使が頭を抱えた瞬間、誰かの名を呼ぶ声がした。

弾かれたように天使が顔を上げて血相を変える。やばい、と小さく唇が動き、未だ光に取られたままの手を取り戻そうとするが、光は火事場の馬鹿力という現象を発揮している。

「頼む！離して…」

「いやだっ！名前とメアド…じゃない、連絡先！連絡先教えてくんなきゃ離しません！」

どこのお屋敷にお住まいですか？！男性と食べ物、服の好みは？！」

「ちよおおおっ！」

「デイラ？」

こんな所で何をしているのだ、と落ちてきた声に光は振り返る。

天使よりも高い位置にある涼しげな双眸に柔らかな輝きが煌めい

ていた。

「そちらはどこのお嬢さん？」

鍛えられたすらりとした肢体を包むのは白の騎士服。見慣れたそれのはずが、まるで別物にしか見えない。

男装の麗人。

「宝塚の男役トップ：！」

「え？」

「いえいえこちらの話しで」

「馬鹿！君が離さないから見付かっただろ？！」

「ディラ？」

柔らかだった麗人の声から温度が消えた。天使はひつ、と声を上げて光の背に隠れるようにしている。

「何だその言葉遣いは。年頃の娘がそんな言葉を遣うんじゃない！」

「煩いな！それを言うなら君もだろ？！嫁に行きそこねるぞ！」

「私は女である前に騎士だ！心配せずとも嫁になど行かん！」

自分を挟んで唐突に始まった言い合いに、光は小さく息を吐いた。美少女と麗人の女らしくしろ、という言い合いはかなりの迫力である。

見た目はそりゃあ敵わないが所作や言葉遣いならば、この二人よりも自分の方が女らしいと言っても良いだろう。

美少女は言葉遣いも動きもどこか粗雑で、きらきらと煌めく気品がどこから現れるのかが不思議なほど。

麗人の所作は無駄なく美しく、流石は騎士だと言えるが、女性と

しての柔らかさはまるでない。言葉遣いが悪い訳ではないが、男社会で育ってきたと言わんばかりの口調である。

やいやいと終わりの見えない言い合いを二人が続けるうちに辺りはすっかり暗くなっている。

光は恐る恐ると声を掛けた。

「あのお」

遠慮がちな声がした方を二人ははっとして見遣った。すっかりと存在を忘れられた光が曖昧に笑っている。

「そろそろ帰らないと家の者が心配するので帰ります。お名前教えて頂いても良いですが？」

あ、後どこに行けばお会いできますかねえ、と光が問えば、麗人はにっこりと笑んだ。同性だというのにどきりとするほど魅力的な笑みである。

「君の家まで送ろう。行くぞ、ディラ」

天使ははいと不服そうな返答をし、怪訝に光を見下ろしている。

「私はリリーラ・ドナウ。こちらがディラ・ファウル」

「カリイと申します」

そこで麗人と光は首を傾げた。どこかで聞いた名だ。

「君が！」

声を上げた麗人を見上げ、まるで本質は違っただろうにどこか似た  
雰囲気を持つ男の顔を思い出した光は、ああああ！と叫んだ。

「殿下の妃候補！」

「冷血補佐官の婚約者?!」

あんぐりと口を開けて見上げた麗人の表情も自分と同じように間  
抜けており、光は僅かにほっとして頬を引き攣らせた。

## 2-5 魔女が現れた！光は興奮した！

「美味い！」

「へええ」

光が煎れた茶を一口含み、二人は感嘆の声を上げた。

その反応にほっとした光は二人の前に腰を下ろす。モールや屋敷の人間、例のぐだぐだトリオは気に入ってくれたが、高貴な女性に對して煎れるのは初めてだった。

はふう、と息を吐いてから相当緊張していたことに気付く。

「全く別物のようで、風味はちゃんと残っている。ふうん…」

天使はカップに残った液体をじっと観察し、ぺろりと唇を舐めた。その仕種が妙に艶を含んでおりどきりとさせられる。

「君、どここの産まれ？」

この国ではないんでしょ、と確信を持って言われて先程とは違う種類の胸の鼓動を感じた。

天使と女騎士には、知り合いであるモールを頼って田舎から出てきたとしか説明していないのに。

「えっと…発音とかおかしいですか？」

「ううん。言葉に違和感を感じないね。ただ、お茶が苦いからってココを入れたりする国民は居ないから」

「戦中は滋養強壮で飲んだりするがな。まず、一般的には出回らない」

「そんなに高価なものなのかあ…」

「いいや。この城では割と簡単に手に入るよ」

首を振った天使が一冊の古びた書籍を取り出した。それを光に押しやる。

「ギイは魔女が呪いに使うもの。魔女のしもべや神の遣い。それが世間一般の認識。ギイやココを手に来るのは高貴な人だけってこと」

牛を引くきらびやかな衣装を纏った女性の絵。それがどうやら魔女らしく、ほおおと声を上げた光は身を乗り出した。黒一色を身に纏った鷲鼻の老婆、という魔女像とは全く違う。図書館で魔女を描いた絵本を何冊か読んだが、確かにお姫様か、と突っ込みたくなるドレスを着ていた。

どこか神々しささえ感じるその絵に光は興奮した。

「図書館でもこんな本見ませんでしたよ」

うわあすげえ、と日本語で呟く光に、天使はふふんと胸を張った。あ、成長途中の残念な胸は、自分と変わらない。むしろ、自分が勝ったかも知れない。

「代々、魔女に伝わるものだからね」

「へええ。通りで…って？」

その希少性に納得し、そうして、気付く。今の言葉を反芻してぱくぱくと口を開閉する。

天使を指して唇を震わせた。



「魔女？」

「そ」

軽く頷いた天使は指をぱちんと鳴らした。途端、彼女の華奢な指先に生まれる橙の炎。

「自然と精霊の力を借りれる、本物の魔女」

「うおおおお！？」

光が上げた悲鳴に二人はびくりと身体を震わせ、帰宅したばかりのモールと、その供で出ていた執事頭は顔を見合わせて息を吐いた。

我が家の問題児がまた何かやらかしておるぞ、と。

悲鳴が聞こえてきた客間に向かいながらモールは嘆息した。宰相からの呼び出しに応えてきたのだが、そこには王太子と補佐官も同席しており、商家の出であるモールにはいたたまれない空気であった。だが、呼び出しの内容は心躍るものである。

魔女が戻ってくる。

客間の扉を二度叩いてそれを開いた。

「何を騒いでいるんだ」

「せ、先生！先生！！」

ひどく興奮した光に落ち着きなさいとこぼし、そこに見慣れぬ姿を二つ発見する。

「お邪魔しております」

「ドナウ公爵殿…」

数年前、十代という若さで爵位を継いだ美しい女騎士とは何度か顔を合わせたがその程度だ。屋敷に押しかけられる覚えはない。

何の御用でしょうかと開いた口を、モールはむぐりと閉じてすぐに悲鳴じみた声を上げた。

「ローズ先生?!」

モールがあまりに口を開くものだから、顎が外れたのではないかと光は不安げに彼を見遣った。

全く言葉の通じない不信窮まりない自分が現れた時にも動じていなかったらしいモールが、これほど驚愕する理由は天使が炎を操っているからではない。天使を知り合いと間違えていると見れば分かる。

「あー違う違う」

天使は首を振ってから炎を消した。小作りな顔をゆっくりと傾けて唇を尖らせる。

「ローズは母親」

「では!あなたが先生の力を継いだ魔女か!」

「そう。あなたは母の御弟子さん?そんな話し聞いたことないけど」  
「弟子というよりは勝手に付いて回っていたというか…」

モールは気まずそうに頬を掻いた。

「ストーカー？」

「なにそれ」

「ああ、いえすみません気にしないでください」

話の腰を折ってすみませんでした、と光が頭を下げると、何故だか麗人がにこりと笑んでいる。

万人を魅了する笑みだ。何故こんな美人があのかの冷血補佐官の婚約者なのだろう。やはり弱みを握られていたり、政略結婚だったりするのか。

そもそも、何かの間違いではないだろうか。

「君は素直で可愛いね」

「うはあっ！」

胸を押さえて身を縮めた光は、呪術のように声を紡いだ。  
自分の身を、心を護るため。

「そんな趣味じゃない…そんな…わたしはノーマル…わたしはノーマル…」

初恋を女性に奪われるだなんて、あってはならない。

ありえないから！

## 2-6 門番が現れた！ただの門番のようだ

光が魔女と出会う二日前。魔女は腹違いの弟である王太子とその補佐官と対面していた。

魔女を田舎から連れ出した女騎士は同席していない。彼女は産まれた時から王宮の中枢に居たというのに噂話や陰口などに疎く、二十年前に存在した魔女のことすら知らなかったという。

そんな女騎士が知っているはずがない。魔女が国王の隠し子だなど。

真実を知る人間は少ない方がいいと言ったのは、冷酷そうという印象しか受けない無駄に綺麗な男。王太子の補佐官であり、女騎士の婚約者。

自分の婚約者をあれは嘘も付けない女ですからね、と言い切った男。

気に入らない。

魔女は弟である王太子より補佐官に鋭い視線を寄越したが、男はなんの反応も見せなかった。益々気に入らない。

むっつりと、どこか不服そうに頬を膨らませた彼女は報告通りの美少女で、王太子はふむ、と腕を組んで彼女を上から下まで確認して口を開く。

「全く似ていないな。そもそも成人しているとは思えんのだが」「失礼だね。これでも二十歳なんだけど？」

お互いに冷ややかな態度の姉弟。感動の対面とは程遠い。

先に面会した宰相は、二十年前の魔女が舞い戻ったのではないかと錯覚したと身を震わせていた。あまりに似た容姿だったが、二十年前の魔女は笑顔の絶えない柔らかな人だったらしい。つんとした空気の美少女とはそこが違うとか。

なるほど、これが父親が愛した魔女か。

王太子はにやりと笑って問い掛けた。

「この国を継ぐ気はありますか」

何の捻りも裏もない直球の質問に魔女は、可憐な容姿に似合わぬ笑みをくつりと浮かべて冗談でしょ、と肩を竦めた。

「国王が認めたとしても、何の証拠もない、素性の知れないおれを王に据える馬鹿がどこに居るの」

「そういう考えを持てる方なら問題ないと俺は思いますけどね」

顔を見合わせ笑う二人を溜息混じりに眺めていたウォークは、どうしようもない所が似た兄弟だと眉を寄せた。

「それで。父上にはお会い頂けるのか？」

「別にいいけど。会った途端、おれに跡を継がせるとか言い出さない？」

「男系の跡継ぎである俺が居る間は、そんな事は言わんと思っていますが」

「あーそっか。うーん」

魔女は顎に手を当て俯いた。緑掛かった淡い青が揺らめいたと思つた瞬間、彼女は勢いよく顔を上げる。

「これから話す事、他言無用にしてくれる？」

勿論、国王にも。

そう言つた魔女の空気は無意識に二人を頷かせるだけの力があつた。

これ以上の面倒を回避する為にも、彼女が落胤であるとは認められなかった。だが、王族の血が流れているのだと納得せざるおえない力にウォークは息を吐く。

母親の生き写しと言われた容姿の中、人を従わせる力を持った双眸だけは国王によく似ていた。

城門を護る若い兵士が笑顔で許可証を寄越してきた。愛嬌のある日焼けた顔には同年代の親しみと気安さがある。光も同じように笑み返し、それを受け取ってからありがとうと札を述べた。

「おつかい？」

「はい。モール先生の研究材料を購入に行きます」

斜めに掛けた麻袋に許可証をしまい込みながら答えると、気をつ

けてねと返ってきた。

「いってきます」

城門を潜り、まんまと鬼教官から逃げ出した光はにんまりと笑んだ。

その姿を見咎めた男がその後を追ったとも知らずに。

衝撃の出会いの翌日、城下街にある雑貨店から手紙が届いた。

モール御用達のその店は、一応は雑貨店と主張しているが日本で（この国であっても）言うところの雑貨店とは随分違う。陳列している商品は一般市民には不要なものばかりで、光は二度訪れたがそのどちらもモール以外の客は見当たらなかった。

ずらりと並ぶのは分厚い書籍に中身が分からないほど白く曇った硝子ビン。陳列商品のどれが発しているのか、すえた臭いの漂う店内。

魔術師御用達というよりは魔術師専門店モールなのではないかと思ったほどだ。

店からの手紙に眉を寄せ、唸り声を上げていたモールが腰を上げた。

「先生どうしました？」

「いや、明日頼んでいた本と資料が店に届くらしいのだが、店主がギックリ腰で配達出来んらしくてな」

「受け取りに行けばいいじゃないですか」

「それがなあ。明日は呼び出しが掛かっているのだよ」

じゃあ明後日まで待てば良い、という言葉はそつと飲み込んだ。ゲームの発売日に店の前でそわそわと待っている子供のようなモールの様子には無駄な言葉だと思ったのである。店が開いた瞬間に駆け込んで行く気だ。

「じゃあわたしが行きますよ」

「いや」

「お店の場所もぼつちり覚えてますし、大事な物だとちゃんと分かってますよ。」

朝に出れば、先生が帰る前に戻って来れます」

大事な研究材料と一緒にね。

この屋敷に仕える人々は御主人様の「大事な物」の区別が付かない。床に放ってある紙の中には重要な閃きが走り書きされていたりするのだが、侍女たちは全く気付かずに処分する。それは一度や二度ではない。

自業自得でもあるので行き場のない怒りは消化出来ず、御主人様の書斎は清掃禁止となった。本人不在時には立ち入りも禁止されている。

「しかし、カリイは行儀見習いに…」

「一日くらい大丈夫でしょう？先生のつかいなら、鬼教官も許してくれます」

「うむ…そう、だなあ」



こくりと頷くモール。光はこっそりと拳を握った。

## 2-7 王太子が現れた！光は秘密を知った！

この国は王太子に似てのんびりしているらしい。上に立つ人間があだど国民性もそうなるのか。光は一人頷いた。

朝食の時間はとくに終わったはずだが、辺りの人影は少ない。日本なら通勤ラッシュも過ぎた時間だ。もう暫く歩くと商店が見えてくるが、貴族の屋敷が並ぶこの辺りはまだひっそりとしている。慌ただしく通り過ぎるのは配達員や屋敷の使用人たちで、高貴な人というのは朝が遅いらしい。

贅沢な御身分なこと、とごちた光は腕組みをして考え込んだ。目的の店が開くまで後少し。

せっかく早起きして出て来た自分の目的が果たされない。どうしたものか。

「お前は何をしているのだ」

「ひぎゃ！」

背後から掛けられた声に光は悲鳴を上げた。

「なんて声を出す」

「いやだって！全然気付かなかった！どうしてでん？！」

「ライ」

殿下と呼ぼうとした口をごつごつとした手で塞がれると、男はそう呼べと強く言い付けた。反抗する理由もない。

光が素直に頷くと、王太子はゆっくりと手を離した。

「何故、こんな所に」

「それはこちらの台詞だ。お前は城から出て何をしている」  
「先生のおつかいですよ。それよりで：ライ？は何をしてるんですか」

厭味を込めて、呼べと言った名を疑問気味に言う。それに気付きながらも王太子はにやりと笑んだ。

「お前が屋敷から出るのが見えたからな。ウオークの屋敷とは違う方向に歩いていくから何処に行くかと思ったのだ」

「な、なんで？」

「モールの屋敷は俺の部屋から見える」

「視力凄いですね…」

ストーカーか、という言葉は何となく飲み込む。お前など誰が付け回すか、と例の冷血補佐官なら良いかねないが、この男ではどうだろうか。

とりあえず、面倒なことは考えないことにした。

「少しは自分の立場を弁えろ」

「え？」

「お前になにかあれば、また面倒な嫁選びが待っているんだ」

「その作業は続けるべきだと主張します」

「俺の嫁御はおかしなことを言うのだな。我が国は側室は認めておらんぞ」

「だ・れ・が！おまえの嫁だ！」

「お前以外に誰がいるんだ？」

ぬおおお、と呻き声を上げて頭を抱えた。こういう奴なんて言うんだっけ。暖簾に腕押し？馬の耳に念仏？いや、念仏は意味が変わってくるのか？

そんな疑問を一人ぐるぐると巡らせている少女を見下ろし、王太子はくつくつと肩を揺らした。この少女の反応は本当に面白い。

「あ」

唐突に顔を上げた少女は、魔女に会いましたよ、と声を潜めた。

「ほお」

「すごい美少女ですよ。本人は無理だと言ってたけど、ああいう子こそ王妃に相応しいと思うんですよ」

「あの人に王妃は無理だな」

「ま…ディラも言ってたけど」

「……ああ見えてあの人俺より年上だ」

「…え？」

「今度二十一になるそうだ」

こちらの世界は時の流れが違ったかと首を傾げたが、一日は二十六時間と長めで一年は三百三十三日。

元の世界とはほとんど差がないはずだ。

「う、うそだ！わたしより年下だとばかり」

「俺も今だに半信半疑だ」

あれが自分の兄弟だというのは疑わないが、年上とは認めたくない。

嘘だあ、と呟き続ける少女の耳元で、ついだたとばかりに秘密を一つ打ち明けた。

「あれは腹違いの姉でな。王妃にはなれない」

呆然と見上げる少女の頭をくしゃりとやって、王位を奪ってくれたら俺も楽なのだがな、と冗談にならない冗談を零す。

少女がほうけていたのは一瞬で、直ぐに険しい表情を作ると唇を尖らせた。

「冷血補佐官殿に怒られますよ」

「だろうな」

「ついでにわたしも厭味言われるんでしょ…」

あーやだやだ。ねちねちと厭味を言う男の姿が簡単に思い浮かぶ。目の前の男はそれを飄々と受け流すのだろうが、光にはそう簡単な事ではない。

あの、人の神経を逆なでする技術は中々のものだ。無駄な美貌の次くらいに。

「嫌！離しなさいよ！」

「まあまあ落ち着いて」

「気持ち悪いのよっ！手を離しなさいっ」

男女の纏れる会話に二人は顔を見合わせた。閑静な空気を震わせるそれはまだ続いている。

「何事でしょう」

「面倒には関わりたくないのだがな」

ぼりぼりと頭を掻いて、気怠そうに言いながらも声のした方へと歩き出す。光もその後を追いつながら会話を聞き取ろうと耳をすませた。

「あたしは貴方の妾になる訳じゃないわ！」

「な、なにを言ってるんだ」

「貴方の屋敷に入った娘がどうなるかなんて、子供だって知ってるわ」

気位の高そうな甲高い声。張りがあってよく通る。対称的におどおどとした男の声は小さく掠れていた。

「私の申し出を断れば、家がどうなるか。分かっているようにだね？」

「悪代官か…」

最低、という呟きと共に隣に居る男を見上げる。

この場合、彼が助けに入れば白い髭の老人になるのだろうか。桜吹雪の御奉行か、暴れん坊の將軍様、というのもありか。

この時、彼女の頭には時代劇の名場面ばかりが展開されていた。隣にいる王太子は本物の王子様であって將軍やお奉行ではない。

残念ながら光の思考には、一般女子が思い浮かべるはずの白馬の王子様という像は微かにも現れなかった。

## 2-8 癩癩持ちが現れた！だが、光は出番が無かった：

ミレ・ジジェスは怒っていた。十五年の生涯で一番と言って良い怒りに苛まれている。

元来、短気で思った事を直ぐ口にしてしまう彼女は、周囲に癩癩持ちだと思われていたために、これがどれだけのものかと表しても普段通りの反応しか返ってこない。あーはいはい、落ち着いてくださいませお嬢様。美味しいお菓子がございますよ。

それが彼女の怒りを増長させた。

「信じられない！お父様は一体何を考えておいでなの？！」

ベッドに枕を投げ付ける。縫い目の隙間から飛び出た羽根を、控えていた侍女は何も言わずに片付けた。

小さな桃色の唇を噛み締める。ふ、と庭に視線をやると信じられない光景が広がっていた。

「あの好色爺！」

「お嬢様！どこでそのような言葉を…」

「煩いわね！」

それどころじゃないのよ！

ミレが叫んで部屋を飛び出すと、背後にはその不作法を咎める声が響いたが当然無視である。構っている余裕などない。

薄い桃色の髪が揺れるが気にせず走る。

「これ！行儀の悪い！」

「ごめんなさいおばあさま！」

杖でゆっくりと歩く祖母が声を上げる。流石にそれには頭を下げたが足は止めない。

大きな音を立ててテラスへの扉を開けた。

「お姉様から離れなさい！」

「ミレ……」

すぐ上の姉の腕を掴む男。そいつをきつく睨め付け、ついでに指をさしてやる。品位など知ったことか。

姉はほっとしたように眉尻を下げた。可哀相なお姉様！わたくしが護って差し上げなくては！

「久しぶりだねミレ嬢」

「ご無礼お許し下さいね、お・じ・さ・ま！」

ミレの言葉に男は頬を引き攣らせるがそれは一瞬のことだった。直ぐににたりと笑んでくる。

「ちょっと見ない間に綺麗になったね」

「まあ。たくさんの女性を手籠めしているおじさまに褒められるなんて」

嬉しいですわ、と作った少女の笑顔は恐ろしいほどに毒々しい。

姉ですら小さく悲鳴を上げた。

「そう言えばおじさまは、我が家から行儀見習を受け入れて下さるそうですわね」

「あ、ああ。だから迎えに……」

「お世話になります」



そう言つてにつこりと笑むと男は間の抜けた声を出した。

「お姉様は嫁ぎ先が決まっておりますの。他所のお屋敷ではなく、そちらで一から教えて頂かなくては」

ねえ、お姉様。

妹の笑顔と言葉に、姉は思わず頷いた。

自分が行儀見習にという話がきてからというものの、妹の機嫌はたいへん酷いものだった。十五にもなって癩癩を起こして、などと両親は困り果てていたくらいだ。

だが、それはただの癩癩ではない。お姉様はあんな男に許す身体をお持ちなの?!と憤慨した妹に驚いた。

二つ下の妹はどこから得るのか、知識だけは豊富な耳年増である。まさか、伯爵のいかがわしい噂まで聞き及んでいるとは。

妹だけはこの話に反対してくれる。

だが、持つのは古くから続く家柄ばかりのジジェス家。宰相の従兄弟である伯爵相手に拒否することは出来なかった。

両親もすまないと泣いてくれたが、あの男に目を付けられてはどうすることも出来ない。

傷物になろうとも家を守らなくてはと、覚悟したはずなのに。

迎えにきた男と實際顔を合わせてみれば、やはり嫌悪感しか感じない。嫌だ、と言つてしまいたかった。

だが、妹を代わり差し出すなど出来る訳がない。頷いてしまつてから顔を青くした。

「駄目よ! 貴女はまだ…まだ幼いわ!」

「わたくしもう十五です」

つんと胸を張る妹は自分よりずっと強く、威厳すら感じられた。

「ミレ嬢が…」

ふむ、と男は顎髭を弄りながら、少女の全身を舐めるように視線を這わせた。ミレの背筋をぞわぞわと悪寒が広がる。

気持ち悪い！

「私は君でも構わないよ？」

そう言って近付いてきたかと思えば、少女の肩を抱き寄せた。

自分くらいに幼ければ手も出しまい、というミレの考えは甘かった。

姉はおっとりとした淑女で、身体付きも女らしい。自分といえば、外見はまだ幼く十五にはあまり見られない。伯爵も流石に手を付けないだろうと思っていたのに！

女だったら何でもいいの？！

「離して！あたしは貴方の妾になるわけじゃないわ！」

「な、なにを言ってるんだ」

「貴方の屋敷に入った娘がどうなるかなんて、子供だって知ってるわ！」

うろたえる男に更に言ってる。だが、伯爵は直ぐに気を取り直してにたりと笑んだ。

「私の申し出を断れば、家がどうなるか。分かっているようだね？」

その言葉に唇を噛んだ。こうやって、何人の娘を傷物にしたのだろう。

ミレは我慢の限界だった。

「今すぐこの手を離さないのなら、わたくしが貴方を成敗するわ!」  
「おお怖い」

男は肩を竦めるだけだった。

女を馬鹿にするんじゃないわよ!

ミレはドレスに隠し持った護身用のナイフに手を掛けた。

「やめておけ」

怪我をするぞ、と背後から掛けられた声にミレは驚いた。

## 2-9　かくさんが現れた！　かくさんはうっかりなキャラの人だった！

ミレが慌てて振り向いてみれば、見覚えのない男女二人組がそこに居た。その堂々とした不法侵入者に眉を寄せる。

「その手を離さない」

びしり、と男に指先を向けたのは、自分と変わらない年頃の少女だった。

簡素だが作りのしつかりとしたドレスを身に着けた彼女は、どこか良い屋敷の侍女に見える。

だが、侍女が他所の屋敷に侵入し、顔の知られた伯爵に命令口調で指先を向けるなど。こんな無礼を働くだろうか。

隣に居る男もこの辺りでは見掛けない顔だ。着ている物は上等だが、眠そうな眼差しのせいかどこかの三男坊といった風体をしている。

だが、確かにどこかで見掛けたことがあった。

いつ、どこで？

「だ、だれ？」

「かくさんです！」

ぼんやりしたままの姉がぽつりとこぼした問いに、少女は鼻息荒く言い切った。

「何だそれは」

「あー待って下さいね。今、印籠を出します」

彼女以外の人間が、いんろう？と首を傾げているのを尻目に、彼

女は麻袋に手を突っ込んだ。ごそごそとそれを漁る彼女を呆気に取られたまま見詰める。

「あつた！」

じゃっじゃじゃーん！と声を上げて光が取り出したのは銀製のスプーン。それを胸を張って見せ付ける。

「これぞコルト公爵家の薔薇が入ったスプーン！」  
「何故そのようなものを……」

いや、さすがに王家の証とか怖くて失敬出来なくて。公爵ならまだ、ねえ……売ったら高いかな、とか思ってますよ、ええ。

そう呟く少女の横で呆れたように額を押さえた男。だが、口元は笑みで歪んでいる。

変わった人たちだ。

その二人、いや男を、信じられない、というようにじっと見ていた伯爵の手が震えていた。肩に置かれたままの手からそれが伝わってくる。

伯爵の顔色は蒼白を通り越した紙のような色をしていた。

え？あれ本物？大分変わり者だが、彼女は公爵家縁の人？

では、この窮地も救ってくれるかも知れない。

ミレは混乱しながらも一筋の希望を見付けた。伯爵といえども、王家の血を引く公爵家に手出しは出来ないだろう。

そう思いながら見れば、男からは高貴な雰囲気を感じられる。きつとどこかのお茶会ででも御見掛けしたのだろう。

「で、殿下」

「久しいな、ミルコ」

姉と同時に吐き出した、でんか？という声は、もうバレた、という光の声に掻き消された。

「な、なぜこのような所に」

「それは俺が聞きたいな」

「そ、それは…」

「貴殿の従兄弟殿がなあ、貴殿の悪癖に手を焼いていると愚痴を零していたがまさか本当だったとは」

「殿下…その」

なんとか取り繕おうとミレから離れた伯爵が、しどろもどろで視線をさ迷わせている。相手が王太子とはいえ、孫ほどの年齢の男相手にみつともない。

光はちっ、と行儀悪く舌打ちすると伯爵に向かってにっこりと笑んだ。

「ここで悪代官なら、ええい口封じだ、やってしまええ！ですよ。

さあ、さあどうぞ」

「どうぞではないだろう…」

「あ。わたしは戦力にはなりませんからね？充てにしないでくださいね」

「誰がするか」

王太子と少女のやり取りを啞然と見詰める。王太子相手にこの物言い。一体何者か。王太子の侍女かと思ったがそうではないだろう。

姉妹は顔を見合わせた。

何だかとてもない事に巻き込まれた気がする。

## 2-10 獲物が現れた！光は逃がすまいと必死だ！

「俺は宰相殿の言葉など信じていなかったのだぞ。貴方は奥方が居る身。神の教えに背くような事はするはずがない」

なあ、ミルコ。

にこりと笑んだ王太子に、伯爵は何の反応も出来なかった。やる気がないだけかと思っていたが、この男、中々に意地が悪い。光はうむ、と腕を組んでやり取りを眺めていた。

王太子だと知れてしまえば自分の出る幕などない。お忍びだと思ったからこそ、時代劇を真似てみたのだ。公爵家縁の者と知れば無下に扱えまいと思ったのに。

出番を奪われた形になり、光はこっそりと肩を落とした。実は楽しんでいたらしい。

「あ…」

恐る恐る掛けられた声。すっかり忘れていた。

「はい。この事は御内密に！」

「え？」

きょとん、と首を傾げたのは姉妹の姉だった。妹は愛らしい顔を精一杯歪めているが、それすらも可愛らしい。

この数週間、出会う人間が美形ばかりで、自分がひどく惨めな容姿に思えてしまう。普通、自分が普通なのだと主張。彼らがちょっと、いやかなりおかしいのだ。ああ、モールの丸々とした癒し顔が恋しい。

「何故、バライ殿下がこのような所に居るのですか」

「わたしのストーリーキングをしてたから…」

「聞こえませんか」

ぴしゃん、と言った美少女を光はまじまじと見下ろした。

自分の世界では人工的にしか有り得ない、薄い桃色の長い髪。小作りな顔に意志の強さが現れた大きな緑色。その顔の小ささは魔女と変わらぬほどで、芸能人顔負けだ。美女力は魔女に軍配が上がるが、気の強そうなところは甲乙付けがたい。

「そもそも、貴女は何者です」

自分よりいくつか年下に見える気の強い美少女。実際には同じ年齢なのだが、童顔に加え小柄で華奢な彼女は中学生にしか見えない。頭は悪くなさそうだ。自分の素性をべらべらと話す訳にはいくまい。さて、どうはぐらかすか。

「それは俺の嫁だ」

「ばっ…」

馬鹿か！

光は悲鳴を上げた。そして、その場の視線を集める。

「よめ?!」

「そのような話、私は聞いておりませんが!」

「公表しておらんからな」

「どこの令嬢です?!」

「あー」



伯爵の追及を面倒そうに流しながら、視線だけでお前が説明しろと命令するが知ったことか。自分でいらぬ種を撒いたのだから自分で何とかしろ。

っん、と横を向いて無視してやるが、美少女に腕を引かれた。

「本当に貴女が正妃様に？」

「まさか。殿下の戯れ事に耳を傾けてはいけません。彼には妄想癖がありますね」

「おい。妙な噂を植え付けるな」

「殿下は黙ってなさい！良いですか？伯爵や貴女もご存知ないような見た事もない平凡な娘、いえわたしなんですがね。そんなわたしが正妃になって有り得る訳ないでしょう。早く身を固めろと言われ続け、面倒になった殿下は、若い娘全てが自分の嫁に見えるのです。ええ。全ては殿下の妄想です」

ご心配なく、と光が言い切る。美少女はぼかん、と光を見上げた。どこか誇らしげに見える風変わりな彼女の背後で王太子が呆れたように首を振っている。不敬として切り捨てられても仕方ない言いようだが、殿下はそれを咎める気はないらしい。

本当に、一体何者なのか。

「それよりもだ、ミルコ」

「は！」

がらりと声音を変えた王太子が伯爵を見下ろした。うつすらと笑みを浮かべてはいるが金の双眸は全く笑っていない。

「今後、お前の屋敷には行儀見習は入れぬ。侍女も五十以上でないと認めん」

「で、殿下…」

「後は書状にしてウォークに送らせる。異議は認めん」

顔どころか全身を蒼白にした伯爵に強い口調で言い付けた王太子は、光に向かって行くぞと声を掛けた。

「お待ち下さい」

凜とした美少女の声に王太子は初めて彼女を正面から見下ろした。ずっと腰を落として最上の礼をする少女は、そのままの体勢でありがとうございましたと口にしたが心が籠っていない。義務と言わんばかりだ。

顔を上げた少女は、案の定笑顔すら作っていない。むすりと王太子を見上げてきた。

「ですが、頼んでおりませんわ！わたくし、自分で解決いたしましたのに！」

「ミレ！」

姉はさっと顔色を変えた。王太子相手に何て事をと、その小さな肩を後ろから掴んで引き寄せたが、妹の視線は鋭く王太子を刺したまま。

あの少女の不敬を許すのは自分の正妃だからであり、妹を同じように許すとは限らない。いや、許す訳がない。

だが、王太子の反応は信じられないものであった。

「くっ…はっ！」

「うわあ。ツンデレキャラだっ」

妹の不敬に王太子は声を上げて笑い、光はきらきらと眼を輝かせた。

「俺の身分を知ってもその態度か。面白い」

にやりと笑む王太子。光は彼を押し退けて少女の手をぎゅっと握った。

「貴女王妃になりませんか?! いえ、なりましょう!! なるべきです!!」

光の双眸はきらきらなんて可愛らしいものではない。獲物を見付けた狩人のようにぎらついていた。ぎゅっと握った両手を離すものと力を込める。

ミレは光と、その背後で苦笑する王太子を啞然見詰めた。

### 3-1 坊ちやま（前書き）

お久振りでございます。番外編より本編が書けたので、いい加減こちらを投下。

有難申し訳ないことに休んでいる間にお気に入り件数が増えて。随分休んで申し訳ありませんでした！

### 3—1 坊ちやま

「ミレを召し上げて欲しいです」  
「ならん」

その何度目かも分からない即答にもめげず、光は美貌の補佐官に詰め寄った。

有り得ないことだが、見様によつては光が迫っているように見える。有り得ないことであるが。

「一度会ってみてくださいって！本当に気が強くて可愛くてですね」  
「気が強いなど害にしかならん。王妃は慎ましく従順でなければ」  
「え。待って。わたしのどこが従順だと…」

「それはいま調教しているだろうが」  
「ちょ、調教で！わたし金遣い荒いんですよ！ドレスとか死ぬほど買いますよ！慎ましくなんかないっ」

にたり、と笑んだウォークに光は喚いたが、彼はそうかそうかと頷くだけ。

「衣装部屋に行くか。お前の寸法に合わせた服が山ほど用意してある」

宝石もいくらでも持っていけ、という補佐官の言葉に光は頭を抱えた。何故、いつの間に、と呪詛のように言葉を続ける。

「さ、最高級の物しか口にしません！」

「そうか。当然だな」

「うああああ！他に贅沢が思い付かない！」

「貧相な頭だな」

煩い！と叫んだ光の背後で、悲鳴が上がった。

振り返ると、小刻みに身体を震わせた侍女長が鬼の形相で光を睨み付けている。

しまった。熱くなり過ぎて物音に気付かなかった。

主に従順な侍女長が、彼の返答も待たず扉を開ける事はない。どれだけ待っても何も返してこない主の部屋から光の喚き声が聞こえてくれば、流石の侍女長も扉を開けてしまうだろう。

「坊ちゃまになんて態度です！」

案の定、主人への態度の悪さを指摘してきた。別に、わたしのご主人じゃないし、と口の中でもごもごごちる。

「言いたい事があるのならはっきりとおっしゃいなさい！」

「何もございません」

しれっとした笑顔で答えた光は、ちゃんと背を伸ばしてから身を引いた。更に小言を言おうと口を開いたカッセの名を呼んだウォークは、嘆息しながら懇願する。

「坊ちゃまは止めてくれ。それから、これの態度はまあ、いい。許してやれ」

「ですが坊ちゃま！」

「だからな……」

我関せずとすましているようだが、坊ちゃまと呼ばれるウォークを嘲笑うかのように唇の端をひくつかせている光。それを横目で見遣り、彼は深々と息を吐いた。

産まれる前から世話になっている侍女長には強く言えない。おつとりと浮世離れた滅多に会わない実母より、育ての母親とも言える彼女を前にしては冷徹な男も形無しだ。

「もういい。それより、何用か」

「お客様がおみえですが如何いたしますか」

「客？」

今日は休日だが来客の予定は無かったはずだ。そもそも、たまの休日を他人から邪魔されるのは嫌いである。家から出る事もしない。休日に押しかけてくる気の利かない図々しい人間と言えば二人ほど思い当たるが、一方は先日のお前の勝手な外出に対しくどくどと説教したせいか、暫くはお前の顔を見たくないと言っていたこともあり、彼ではないだろう。

となればもう一方か、と小さく息を吐いた。

「マクか」

だが、侍女長は首をふった。彼女が告げたのは想定外の人物。

「ジジェス伯爵様とご令嬢ミレ様でございます」

「ミレ！」

パア、と輝くような笑顔で部屋を飛び出した光の背に、侍女長はカリイ！と名を呼んで制するが欲望に忠実な彼女が止まるはずもない。

馴染みの男たちより随分と面倒なものがやってきたと、ウォークは深々と息を吐いた。

光が、気が強く愛らしいのだと力説するように、一見しただけで少女の激しい気性が窺えた。意志の強い双眸はじっとこちらを見上げてくる。この年頃の娘としては可笑しな反応だ。うっとりウォークの美貌に見惚れるのが普通の女性としての反応だが、この少女は親の仇でも見るような鋭い視線を送ってくる。その横で彼女の頭を撫でる光ほどではないが、面白い少女だ。

「まずは、突然の無礼をお詫び申し上げます」

そう言って腰を折った男、ジジェス伯爵にウォークはゆるりと笑みを向け構いませんよと声を掛けた。

何の約束もなしに公爵家に押し掛けてくるとは非常識にもほどがある。だが、公爵家に繋がりを持たない彼にはこれしか手段がなかったのだろう。

何度か顔を見た程度。王太子にお前の記憶力はおかしい、とさえ言わしめる彼であっても、紹介もされていない伯爵の顔と名までは一致しない。王太子からジジェス家での一件を任された彼は、当然ながら名前にしか覚えのない伯爵の身辺調査も行った。報告によれば既に嫁いだ娘も、孫もいるということだったが、甘く整った顔立ちの伯爵はとも四十代には見えない。どう見積もっても三十代だ。

「娘たちをお救い頂き、感謝致します」

「ありがとうございました」



ここでようやく娘が声を上げ、優雅に腰を折った。少女らしい高音の凜とした声は耳障りのよいもので、光はそれすら愛らしいとにやにやとしている。

「お嬢様方がご無事で何よりでした。こちらこそ、世間知らずの娘と殿下が迷惑お掛けしました」

「それはわたしのことか」

「何か申したか」

「いいえ」

にっこりと作り笑いをする光を視線だけで黙らせる。か弱い少女ならば悲鳴の一つも上げるような眼光の鋭さだが、光はふいと視線を反らせただけ。それどころか、令嬢の頭を撫で、今日は纏めてるんだねえと、薄い桃色の後れ毛を弄んでいた。図太いにもほどがある。

「ミレは今日も可愛いねえ」

「お褒め頂き光栄です御姉様」

「おね…！」

光は衝撃を受けた。はにかんだ笑顔でこちらを見上げてくる彼女。

「か、可愛い！」

堪らず、その細身の身体をがばりと抱き締めた。父親がひつ、と声を上げているが無視。美貌の人がおい、と声を掛けてきたのでちらりと一瞥する。

「何ですか。譲りませんよ」

「お前は…いい。ミレ嬢を連れて下がっている」

「はい」

侍女長の指導により少しは見れるようになってきたかと思っていた娘だが、相変わらず頭を抱えたくなるような態度だ。もう少しきつく躡けるべきか。

こんな時ばかり返事が良い光は、にっこりと笑んでから少女を連れて退室する。彼女は何か言いたそうにこちらに視線を寄越していたが、光が気付くはずもなく扉は閉められた。

「さて」

入室してすぐに勧めた長椅子に今度こそ座って頂こうか、と。ウオークが視線だけでそれを促すと、伯爵はおずおずと腰を下ろした。

「本来の御用件を伺おうか」

年齢はそれこそ親子ほど離れているが、れっきとした身分差というものがある。本当にあの娘の父親かと疑うほど気弱そうな伯爵は、はい、と小さく頷いた。

「何もない部屋ですが、まあゆっくりしてね」

「はあ」

執務室の向かいにある空き部屋の一つを、光はこの屋敷での自室として与えられていた。鬼教官の不在にしか使用しないこの部屋は、主人の休憩用にと侍女長が詠えたらしいが、執務室に籠ったままのウォークには不要である。

簡素な寝台に長椅子が二組。目立った家具はそれくらいなものであった。

「元々、無駄美人の休憩室なんだって。わたしも寝泊まりしてる訳じゃないから、ほとんど使わないんだよね」

長椅子に腰を下ろした光はその横をミレに勧めた。

「無駄美人？」

初めて聞く造語にミレは眉根を寄せた。

「公爵さまのことですよ。ミレも思うでしょ？ 無駄に綺麗なくせに酷い性格」

「こ、公爵様にそのような口を…」

王太子への態度も酷かったが、隙の一つもなさそうな麗人に対してもこの物言い。この人は何者なのだろうか。

啞然としたまま彼女を見詰める。ごくごく普通の同年代の少女に見える。態度は大物だが、その立ち振舞いは貴族にすら見えなかった。きちんと躡られた幼児にも敵いそうにないほど破天荒に見える。

「それで？ わたしに何の用なの？」

唐突に表情を変えた光に、少女は小さく息を飲んだ。自分より僅かに年を重ねただけであろう光の視線。年齢に見合わない威圧的とさえ感じられるそれに、ミレは一瞬だけ唇を噛み、意を決してお願いがございまずと声をあげた。

「わたくしを貴女のお側に置いて下さいませ」  
「え？」

きょとんと。光は真ん丸に目を見開いた後に忙しなく睫毛を瞬かせた。

### **312 御姉様（前書き）**

お久し振ります。お久し振り過ぎて、いろいろと迷子状態です。

「えっと…」

彼女の真意が読めず、光は困惑を主張するため眉根を寄せて少女を見上げた。

光の前に立ったままの彼女は意思の強い双眸でこちらを見下ろしているが、その奥でゆらりと揺らめく不安げな色を見逃さなかった。

「わたくし、貴女のようにになりたいのです！」

「へ？ わたしみたい？ へ？？」

初めての言葉に柄にもなく動揺する。

会うのは二度目。それもほんの僅かな時間であったが、彼女が人を担ぎ上げようとするような娘には見えない。

口を開かなければ可憐な美少女。たおやかに見える外見とは程遠い苛烈な性格だが、感情が表に出る素直さは光が好むところだ。

建前を用意して光に取り入ろうとしているとは思えない。いや、思いたくなかった。

「貴女さまは否定しておられましたが、本当は殿下のお側に仕えるのですよう」

「いや、だからね？」

「わたくし、力が欲しいのです！ 貴女のように強くありたいのです！」

「わたし強い？」

「はい！ ご自分を隠さない強さ！ 殿下にも公爵さまにもあの態度！」

「え？ そこ？」

「はいっわたくしもどんな身分のお方が相手でも、屈したくないの

です！」

ぐっと握った拳をそのままの力強さで光の両手を握りこんでくる。至近距離に現れた新緑の双眸が宝石のように煌めいていた。

ふ、と小さく息を吐いて光は美少女から視線を落とした。

「分かった。公爵さまに頼んでみる」

「御姉様！」

ミレは強張ったままであった表情を一変させ光に抱き付くと、ありがとうございますと礼を述べた。

きゅっと細い肢体を抱き返した光がにったりと黒い笑みを浮かべた事には気付かずに。

飛んで火に入る夏の虫って古い悪役が使う言葉、自分が使うことになろうとは。

ウォークは薄い唇に指を当てジジエスの言動をじっと観察していた。初めこそは身を竦めていた伯爵だが、次第にこちらをしっかりと見据えてくるようになった。娘の強い視線は彼譲りか。

口を挟まずにじつと話を聞いていたウォークはゆつくりと頷く。

「片付けは、済んでおります。貴方が危惧するようなことは起きないでしょう」

ゆつくりとカップに口を付ける。喉に流し込まれる苦味の強い茶に眉を潜めてしまうのは、あの少女が煎れる茶に慣れてしまったからか。横の茶菓子にも手を付けた。

「娘は、カリイ様のお」

「お父様！ミレをわたしにくださいっ！」

ノックもなしに扉が開かれた瞬間、常識の通用しない娘が飛び込んできた。ウォークは頭を抱え、伯爵は呆気にとられて少女を見上げている。

「お前は、本当に…」

「公爵は黙ってて！お父様！」

「へ？あ、はい？」

「大事にします！まだ大した稼ぎありませんが、きっと幸せにしてみせますので黙ってミレをわたしにくださいっ」

「お、御姉様…」

ちよつと待て。何故娘の背後で感激したように瞳を潤ませているのだ。お前たちはそういう趣味か。

ウォークはますます頭を抱えた。

「お前はうちの行儀見習いだ」

「ああそうですね！ではまず侍女長に…」



「あれの主人はわたしだが?!」

思わず声を荒げてしまってからウォークは小さく息を吐いた。この娘にこちらの思惑など通じないのを染々と噛み締める。

「ああ、自分が蚊帳の外だから拗ねてるのですか？」

「…馬鹿を言うな」

「では公爵さま。ミレをわたしの教育係りとして雇って頂けますか？」

教育係りとは。

やれやれと頭を降ってから小さく笑ったウォークは、分かった、と頷いて見せた。

麗らかな陽射しを受け、光はぼんやりと窓の外を見下ろした。

こんな日は洗濯をするものと光は身に叩き込まれており、こんな豪華な部屋で優雅にお茶をすすっていればもぞもぞと落ち着きもなく  
なるというもの。

この世界に迷い込んで早半年。

両親が心労で倒れる、なんていう心配はしていない。死体が見つからない限り、あの両親なら「どこかで元気にしているだろう」と安楽的に考えるはずだ。

我が親ながら、とは思えども、我が親だからなあ、と息を吐いてしまふ。

「お姉さま」

ふわりと笑む少女はその見目の儚さとは違い、声音も視線も強い。

「そろそろ練習を再開しましょう」

「は、い」

がくりと項垂れた光は、口の中で小さく、どうしてこうなった、と  
ごちた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3383r/>

---

断固拒否！

2011年12月28日01時29分発行